何事をするにも駄目だと觀念する事が、駄目に導く原因である。六ケ敷いと觀念する事が六ケ敷くする原因である。其反對に如何に厄介な事でもやればやれると信じてやれば、たとへ如何なる困難があり、故障が起つて來てもそれに忍び、それを破つて進む事が出來るものである。どんな六ケ敷い事でも、やれぬ道理はないと信じてやれば、案ずるよりも產むが易い結果にもなるものである。

現に朝鮮には澤山の人が居る。働いて喰つて居る。優秀なる日本人が住めぬ理由はない、働いて喰つてゆけぬ道理もない、同樣に滿洲にも、蒙古にも、多くの人が住んで居り、働いても居る環境が違ひ、文字も違ひ、風俗習慣も違つて居る、歐米人も住んで居り、働いて居る以上、日本人が住めぬ理由はあり樣がない、働けぬ道理は存在の餘地がないのである。

唯遺憾な事は、我國の教育が益々軟弱となり、爲めに我民族は、難きを避けて易きに即かんとするに至つた事である。理想信念に生きる意氣を欠ぎ、用意を欠き、薄志弱行の民風が上下を一貫した事である。然し、それは馴致の結果であつて、我國民固有の性格ではないのである。故に我國民が我國民性に目醒めて來れば、之れ等の弊風を一掃する事が出來ると信ずる。

現に朝鮮にも、滿洲にも、ブラジルにも、アルゼンチンにも、日本人として遺憾なく日本人の性格に生きて居るものがある。其土地の人に比して遙に優秀の成績を上げて居るものがあり、土地の人を驚嘆せしめて居るもある。唯だ斯る人が少く、斯る人につゞく人の少いのが困る事であると思ふ。

山形縣の自治講習所を卒業した人や、講習所で短期の講習を受けた人達は、群山の治講農場に三十戸も移住したが、何れも成績がよい。行つた當初は誰れも彼もあんな小僧が何が出來る、あんな若いもの同志で如何する積りであるかと風評したが、今日は彼等も不明を恥ぢて居る。之れ程に信念に生き、信念で働く人の能率は高い、事績は上るものである。

年は若いが、小林君は信念の人であり、進出の教育訓練を經た男である。理想とする滿洲の經營に第一歩を踏み出した以上は、必ずや足跡をのこす男であると信ずる、僕は、心から彼の首途を祝した、進出を喜んだ。

世に立つ若き人々よ、小林君の意氣に學ぶ所があつてほしい、君の雄飛に則つて貰ひたい、就職難に苦惱したり、徒に働き口がないと愚痴る事の愚なるを知るべしである。

六九　終始一貫

滿洲や朝鮮に來て見ると、我國民性の欠點がよく分る、滿洲に來る人は普通の覺悟ではない、朝鮮に來る人も尋常の決心ではない筈である。而も成功する人が比較的少く、中には挫折して逃げ歸る人ある。

滿洲の支那人はよく働く、富めるも貧しきも、よく働くのが目につく、日本人も働くつもりで行き、行けば働くが、それが永續きせぬ弊がある。其處にはおだてに乘る癖と、偉い顏をして見たい性格と、勞働を賤しむ根性があるからである。

勞働者のお神さんは、必要に迫まられて働くが、物賣りの支那人が奥さん〳〵と、敬意を表すれば、何時か奥さんに成りすまして働かなくなる。生産者の立場より消費者の立場になるが故に、貯はへは出來なくなり、蓄も減るばかりになりて、遂に元の杢阿彌となる、比々皆然りであるとの事である。まして官公吏の妻君や少し名ある商人の妻君に於てをやである。

朝鮮では勞働賃銀が安い上に、柔順であるが故に、鮮人は使はねば損の樣に考へて、或は下男に女中に、大抵の人は鮮人を使つて居る。農民でも、鮮人を耕作に使つて平氣でゐる人が多い。

日本人は鮮人を見て働かぬ人種と罵しるが、自ら働かぬ人間になるのに氣がつかず、やがて鮮人に劣らぬ不勞の人となるは情ない事である。

世に立つ道は多しと雖も、勞働に徹底する程大切なるはなく、勞働の神聖に目醒めるより必要なるはなく、勤勞即生に自覺する程肝要なるはないのである。支那人は働かぬ人を走屍行肉の徒と云つて居るが、我國では穀潰し、喰潰しと、古から戒めてある。故に人は働くべきものであり、働かねばならぬものである。此人生觀に生きるを屑とせざりしは、野蠻の民であり、野蠻の時代の特徴であつたのである。文明人は、働く事の神聖に意識し、勞働を神聖視するのである。たとへ富は千百萬を有すると雖も、又九尺二間の裏長屋に住むと雖も、勞働の神聖に目醒めるは平等でなければならぬ事であり、勤勞が筋肉であらうと、精神であらうと、それは問題ではないのである。唯だ遊むで喰ひ徒手して食はんとする事を恥辱とするが、文明を意識する人の態度とするのである。

故に世に立つ人の道は、働く事であり、働く事に終始一貫する事でる。身を貧賤より起して千萬長者になつても、其處に相當の勞働を見付けねばならず、傭人生活を脱して傭人を使用し得る境遇に立ちても、それ相當の勤勞に服する事が出來ねばならぬのである。苦しい時に働き、生活に苦しまぬ樣になつたとて、働かぬ樣になるは成名の人たる資格はないのである。貧乏に追はれて働き、富貴になつて働かぬ樣になるは、成功の人たる價値はないものである。働く事に終始一貫する事ほど、世に立つ道として確實なる道はないとする。

若い人達は、兎角迷い易いが常である。初めは脱兎の如く終は處女の如くになる人もあり、當初は意氣衝天の慨あるも、中途にして挫折し、唯享樂を欲するものあり、終始一貫する事の出來ぬ人の多きは、誠に情ない事の限りである。

僕は今、滿鮮旅行をして居り、到る處に終始一貫が出來ない爲めに、悲境に沈倫してるもあり、自暴自棄に陷つて居るもあり、悲嘆の極常識を喪ふものあるを見て、一言若い人達の爲めにものせざるを得ぬ心持して、敢てかくの如く言ふのである。

七〇　日高見農場

關東州には日本人經營の農場が澤山あり、年を追ふて殖へつゝある。滿鐵附屬地は廣からずと雖も狹からざるものがあり、此處にも近來農場が出來つゝあるは面白い現象であり、愉快な出來事である。

滿鐵の線路に松樹といふ驛がある。相當の支那人街であるが、そこを過ぎて北へ進むと、線路は、次第に上り坂になる。蓋し其の上りつめた所は、鐵道の最高所である。其處に信號所があり二三人の邦人が勤務して居るが、其處か關子と呼ばれて、居る所である。

信號所のある所にも附屬地がある。四十町歩には足らぬ樣であるが、周圍は山を以て圍まれ、支那人部落はあるが、理想的農場をつくるに屈强の所である。若林不二藏氏は此處に農場を經營し日高見農場と名づけて居る。小林武二君が働いて居る所であり、僕が今回行つた所である。

若林氏は元來の百姓ではない、文筆を以て世に立つた人であり、夫人は賢夫人と評判されて居

るが、やはり農家出ではない。斯る人が、邦人の居らぬ土地に入りて、今や農業讃美の人となつて居るを見ては、農村に生れ、農業に生きつゝある人の、農業に對する愚痴は、恥辱の極みなりとする。

支那は政治的には惠まれぬ所である。從つて何處の國にも見ぬ馬賊なる匪徒が横行して居る。而も馬賊と巡査と兵士と良民とは區別が出來ぬと云へば、全く油斷のならぬ所である。故に邦人の居らぬ所で、仕事をするは命がけである。若林氏は實際懸命になつて、此處に農場を開いたのである。然し、斷じて行へば鬼神も是を避くある、若林氏一家の斷行の勇氣には、敵するものがないのである。

實際、若林氏は信仰に生きつゝあり、子供の病氣も作物の不出來も、盡く信仰によりて解決せむとして居る。理窟を知つて理窟以上に超越する事の出來ぬ連中は、笑ふもあらう、罵しるもあらうが、氏にとりては蚊がさす程にも氣にはなるまいと思ふ。うらやましきは氏の信仰であり、信仰に生きる態度である。僕は小林君の志を壯とし、其前途を祝福して居つたが、氏に接し、其夫人に面談して、小林君の幸福を心から喜むだのである。

朝鮮人と競爭は出來ぬ、支那人と一所に働けぬといふは、滿鮮を旅した人や滿洲に住むでる人から聞く事であり、聞かさるゝ言であるが、之れ等の人は、本當に働く人でなく、働かむとする人でもなく、又信仰のある人でもないのである。

若い人達の進出すべき天地は滿鮮であり、活動の舞臺も亦其處であるを思へば、若い人々が世に立つ道として豫め心得ねばならぬ事は、信仰を得る事であり信仰に生きる事である。信仰に終始が出來る樣に修養する事であるとする。

知る、知らぬは問題でない、出來る、出來ぬも問題でない。問題は强い信念が得らるゝや否や不動の信仰に生きらるゝや否やに在る。信仰は智慧の門をひらき、成功の道に立たしめる、唯一の力である。

彌榮の國である、祖國を思ふ時、彌榮の人であるべき若き人々を思ふ時、僕が日高見農場で感じた事を述べずには居れないのである。日高見農場が如何して出來たか、誰れがやつてるかを、語らずにはをれないのである。遙に日高見農場を望むで、若き人々のためにも其前途を祝福する所以である。

七一　孝道

『木靜まらんとすれど風止まず、子養はんとすれど親待たず』と古人は謂つて居る。

辱交の友田中幸氏は、最近父親を喪ひて、憂愁の日を送りつゝある。氏が父上の病床に侍して看護を盡くしたるも、遂に死別した狀況の通知は、惻々として人を泣かしむるものがあつた。

中田氏の父上は、一家を齊へつゝ村の公事を掌握して、多くの事績を上げ、子女の出世に最善の努力をいたしつゝ、自己の活動を遺憾なくした人である。親として、完全なる人格を有ち、戸主として、權威ある手腕を持つた人である事は、中田氏の說明はなくとも、一度同村を見舞ふた人は、誰れでも知る事の出來る事實である。子として、親の頑健を喜ばぬものはないが、然し其處に子としての油斷が出來る恐れがある。子として齊家の妙を示す親に感謝せぬものはあるまいが、然し、其處に子としての務めを忘るゝ弊がある。親が息災であれば、何時でも孝道はつくせると思ふが人情である。親が世帶を上手にやつてくれ、餘裕が出來て來ると、それに依賴するは

人の弱點である。

何時でも親を安心させ、親を喜ばしむるは孝道である。孝經には『身體髮膚之を父母に受く敢て毀傷せざるは、孝の始めなり、名を揚げ父母を顯はすは孝の終りなり』と、教へてある。父母をして安心させる事の第一は怪我をしたり、病氣をせぬ事である。すぎたる事をせぬ樣にして、常に程よくする性格には、負傷の機會を避け得べく、流行病にも犯されぬ强さがある唯に身體のみでなく、精神の健康に心がけ、迷はず、惑はず、恐れざる態度を示すを得ば、何處の親でも、必ず安心するものである。家業に精勵して其存在を認められ、公務に關係して責務をつくし、以て其存在の價値を認めらるれば、必ず親を顯はす事が出來る。而して其の存在が認められ、其存在の價値が認めらるゝは、名を成す所以である。

支那の賢人曾國藩は、大官となるよりも寧ろ鄕黨の善人となれ、と子女を誡めたといふが、蓋し至言である。世の多くの人よ、名をなす所以は大官や高位の人たる事にありと思ふ勿れ。鄕黨の善人として認めらるゝ所に名を上ぐる道はあるのである。

中田氏が父を喪ふての悲嘆は僕を少からず動かした、其所感の新なるを幸、此處に孝道を說い

たのは、子として親に仕ふる事を專念するならば、必ず立派な人として世に立つ事も出來る。成名の人となる事も出來ると若い人達に敎へ、同時に中田氏の父上に吊意を表せむ爲めである。

七二　程を知れ

人は制限さるゝものである。制限を知るは人である。上下を圍み、前後左右を圍めば、人は押しこめられ、閉じこめられて仕舞ふものである。無制限の世界を知るものは、神と佛である。故に人は、何事の上にも程よくあれと敎へられ、程を知れと戒められるのである。其の程を知り、其程を守るが世に立つ人の道である。

唯だ、程度は人によりて異り、人によりて程を異にすべきである。飯は食はねばならぬが、食ふ飯の分量は人によりて違ふべきである。卽ち身の程を考へて食ふべきであり、程を知つて食ふべきである。負けぬ氣で食ひ過ぎる場合もある、美味とて食ひすぎる場合もあるが、病根は其處に釀成される。勉强するもよいが、過ぎて身體を弱くし、興に乘じて心勞するは、愚の至りであ

る。運動も結構であるが、スポーツの選手であると煽てられ、それにふけつて學生の本分を忘れ果ては身命を台なしにするは、馬鹿の骨頂である。過ぎたるは尙及ばざるが如し、とあるが其通りである。

たとへ病弱の人と雖も、無理をせず身の程を守る。人は長生をする。健康な勢いに乘じて、無理をする人は挫折するが世に多くある例である。金に緣の薄い人でも、程よく使つておけばあるにまかせて使ふ人よりは、金の不自由を知らぬものである。人を信ずるはよいが過信すは間違いが生ずる。我國で信用機關に破綻を生ずるは、多く過信が因をなし、信用の濫用に基くが多いのである。

修養の第一義は、己を知る事にありと云ふが、己を知るにも身の程を知り、程を守るが肝要である、程を知るは容易に似て容易の事ではない、況んや程を守るは更に容易の事ではない。調子に乘りすぎ、勢いに乘りすぎ、力に倚りすぎ、得意になり過ぎるは人間共通の缺點である。而も人は己を見る事うとく、人を見るに敏なるものなるが故に、人の說にきゝ、意見を聞いて反省する事を忘れてはならぬ。同時に親しき友に、知己の人に忠言忠告を怠つてはならぬとする。

若い時は元氣があり、元氣は往々人を過程に導くものである。四十を越した人は分別盛りと云ふが、分別盛りになつて分別が出來る樣では若い時に失敗する、勢いに乘じ度きを押へ、調子に乘るをひかへ、得意を忍ぶは容易の事ではない。然し、其處に修養があり、修養の功德があるのである。

人の世に立つ道は多けれど、制限されるは人と悟りて、行ふ所に制限を知り、それを守るは尤も肝要なりとする。世に立つべき若い人々の間に、此の消息が分り、之を知らしむるは、若い人々を指導する者の正に努むべき事なりとする。

及ばざるは勉めて達すべきであり、過ぎたるは引きしむべできある。而も及ばざるは過少なく、過ぎたるは過多きを知るべしとする。

七三　橋本敎示君

岐阜縣土岐郡瑞浪町といへば、中央線の瑞浪驛のある所である。驛より徒歩にて右廻り十五分

にして、達せられる所で、往くには便利な所である。

其處に橋本敎示君は、模範的の農家經營をやつて居る。同君は今年三十才になり、妻君もあり、子供もあるが、單に家業の經營に模範を示して居るのみならず、家政にもよい手本を示して居る。聞說、同君の兩親はもと水呑百姓であつたが、丹精によりて中等農家になつたものである。斯る兩親を持つて橋本君は、學歷は高等小學校卒業であるが、兩親の身を以ての敎育に敎化されたものであらう。

橋本君は極めて用心深い人であり、情に制せられたり、舊慣に囚はれたりはせぬ。研究心に富むで居つて、聞き放しや、見流しにせぬ男である。それ故に、尋常六年卒業の妻君を迎へたのには面白いローマンスを持つて居り、妻君の家政的手腕が今日に至つたのにも、同君の工夫に傾聽すべきものがある。

農家の經營には、家庭の圓滿が先決問題である事を夙に知つて、隱忍克己其事に努めて居るは賢明である。働き得る事に工夫し、間斷なき勤勞をなさむがために、常に農業の組織改善に努力して居ることは群を拔いて居る。彼の名を聞き彼の經營法を見んとて、近來四方より、視察に來

るものが多い、而も彼は其よ事によりて、家業が妨げられぬ工夫をして居るは、他に類例を見ぬものがある。

彼は讀書によつて、時勢を知り、體驗によりて見識を養ひ、自ら侮るの愚を敢てせず、到る處に農民としての、自重を見せて居るのは誠によい心掛けであり、偶以て自覺したる農民を見るの感がある。彼は今此處處から招待され、有閑を利用して、到る處に出張するが、自己の體驗を話すが上に、辯もよいので、聽衆をよく納得せしむるは、年少なれど役に立つ人になつたと云ひ得るのである。

彼は住宅の前に、圖書室兼應接室を造り、出張の土産として必ず買つて來る書籍や雜誌をならべ、自ら讀書の人となるばかりでなく、視察者に讀書の便を與へて居る。入り口には『青春の汗は老後に拭へ』と掲示し日常の覺悟と意氣とを示して居るは面白い。視察者に一々説明して居ては、時間が潰れ、仕事の邪魔になる。故に彼は年中行事と經營が、一目瞭然理解の出來る樣圖案を作つて之を圖書室に掲げ、之で得研究が願ひ度いとすまして居るは賢いやり方である。

彼の耕作反別は一町七反五畝歩であるが、大正十四年には純益五千百九十九圓餘を上げ一時間

の勞働報酬は四十六錢一厘であつたと云ひ、農業が近來にない不利でなつた昭和二年度に於ても、純益三千三百五十一圓餘を上げ一時間の勞働報酬は三十一錢四厘であつたと云ふ、故に彼は農業ほど難有いものはない、儲かるものもないとて、農業禮讃は信仰的になつて居る。

彼は今稻作、麥作、養蠶、養豚、蔬菜、促成、柿、養鷄、牛、雜穀の多角形農業をやつて居り、これ等に要する時間を計算し、以て勞力の平均を得る事に腐心して居る。一面妻君を督勵して、飯の炊き方より動物の飼育管理まで遺憾なきを期して居る。而も名士の講演があれば何處へでも行く、意見を交換する機會があれば、誰れとも落着いて話す、宛然閑日月があるかの如しである、心持よい襟度を示す男である。種子を買ふにも、鷄や牛を買ふにも、徒に人任せにはせぬ。必ず實地の踏査をなし、納得が行かざれは買入はせぬ。故に彼は廣告ではつられぬ、宣傳には乘らぬ男である、以て彼が用心深い男であり、入念の人である事が分るのである。

彼は不學の身なるを知つて、自修を忘らず自習に努めて、自己完成をなしつゝある。彼は齊家の道に悟りて、家庭の圓滿に深き考慮をなして居る。彼は農業を禮讃して、其經營改善に研究工夫をこらして、今や範を四方に望まれつゝある。彼ほ自重して社會上の農民の地位を向上せむ事

に注意をして居る。彼は漫りに動かず徒に移らず、必ず用意を愼重にする迷惑の民と目せられ、自ら迷惑の民たらむとする農民の間に伍して、超然として儀表的態度を示し、毅然として新しい農民の面目を發揮しつゝあるは、我農界のために意を强うする所である。

彼は僕を信じて相談をなすが、僕も彼よりして活資料を得つゝある。師弟の關係はないが、師弟の關係あるものゝ比して、懇意の間柄になつて居る。

農村の若い人達は、今や多くの惱みを持つて居るが、中には橋本君に則つて現狀打開の出來る人あるを信じて、更に橋本君の活動振りを紹介する事にした。彼のやり方は世に立つ道を敎へて居る、農村の若い人達の世に立つ道を確に敎へて居るのである。

七四　腹藝

時代は變はつても、所は變はつても、相手の人が變はつても、日は東から登り西に沒するが如く眞理はかはらぬものである。古今を一貫し、時處位を超越する所に、眞理はあり、哲理は存す

るのである。

人の働きは、材智によるもあり、技能によるもあるが、目立つ仕事は多く腹藝で出來るは眞理であり、哲理でもあるとする。材智の仕事は拔け目はないが細かい憾みがあり、技能による業績は人を利する小さい嫌がある。腹藝に至つては、乘るかそるかの仕事をなす時に必要であるだけそれ丈け、大きい仕事が出來偉い仕事が出來る。故に古往今來、大きい仕事は腹藝でやつたものであり、偉い成績は腹藝によるが多いのである。

福岡縣の筑紫郡は、福岡市を包圍する所であるから、縣內でも農事が進むで居らねばならぬが事實は之れを裏切つて、福岡縣の北海道とさへ稱へられし所である。電車で四十分はかゝらず汽車で三十分で行ける雜餉隈に、もと郡役所があつたが、其處には今尙松やすゝきが生ひ茂つた原野がある。九州軌道は其處に遊園地を設けたり、住宅豫定地をつくつて居るが、尙半分は原野のまゝに放棄してある。九州一の福岡縣の縣廳所在地である。福岡市、日本全體から云つても五位を降らぬ、大縣の都市附近に、原始的の土地が放棄されてるは、蓋し奇觀であるが事實である。

筑紫郡は養蠶で持つてる郡であつた。交通不便なるが故に養蠶が發達した長野縣を思ひ、交通

便利な都市附近に園藝農が發達してる事を考へて見ると、福岡市と接觸せる地方が、養蠶でもつて居つたとは、誰れも思ひ付く事が出來ず、考へる事も出來ぬ事であらう。然し筑紫郡は養蠶郡であり、養蠶を郡の重要事業として居つたのは事實であつた。故に農會は振はず郡農會の存廢問題は、何時も此郡から起つたものである。

時は來た、郡農會に奥村利雄君が赴任してから形勢は一變した。郡農會長はかはり、技術員もかはり町村の人氣もかはり、今や郡を擧げて更生の道程に在るは目覺しき事の限りである、奥村君は熊本縣農學校の出身者であるが故に、福岡縣にはよい背景がない、其處に奥村君の奮鬪が生れ、活働が始まり、技術員にしては珍らしい腹藝をもやる事になつたらしい。

奥村君は晝夜兼行の努力をして居るが、十六ヶ町村を相手では手足の屆かぬ憾がある。そこで同君は小雜誌を出したが、郡農會には其費用がないのは勿論である。會報代は集めにくい、雜誌代は集金に困まるものである、而もそれを敢てするは同君の腹藝であつた、近來は、略四千部を版行して、經濟がもてる樣になつたといふが、そこに到らしめたのは、同君の努力であつた。

農事組合は何處でも、奬勵して居る。故にあるに不思議はないが、實行を旨として不實行の組

合が多いのである。然し、今日の筑紫郡の農事組合はすばらしい勢ひを以て、普通農業に園藝に畜産に精進をなしつゝある。特に驚くべきは、婦人農會の設立であり、其活動である。或村では婦人の申合はせで勞働服さへつくり、今や全部の婦人はそれに則らむとして居る。總會は何時でも大入滿員で、遠きは四里も厭はず赤坊を背負ふて出てくる樣は涙ぐましき事の限りである。故に農村はあげて、農業氣分で旺溢し農村生活に向上せむ勢ひを示して居る。斯くの如くしたのも奥村君の指導によるが多いのである。福岡縣は我國での米産地であるが改良が出來ず、時勢化の出來ぬ事に於いて有名な所である。原種を縣内に求めて得られぬ關係で、筑紫郡丈けに思ひ切つて岡山縣から百五十石の種子を購入し、今年の如きは特によい成績を示して居るが、それも注文を取つたのでもなく、金があつた爲めでもないのである。奥村君の自覺と白水副會長の決斷とによるといふが、技術員としては珍らしい腹藝であるとする。

奥村君は何時でも責を負ふ覺悟を以て居り、自決の腹をきめて居る男である。喰はんがために職務に戀々はせず、利達のために顯官にこびるを敢てせぬ男である。唯最善の努力をし、最近の技能を以て農民を指導誘掖するに懸命である丈けである。世に奥村君と同一の地位に立つてるが

あり、立むとする人もあらうが同君に則るべしとする。

奥村君は世に立つ道を知つて居り、世に立つ道に立つて居る男であると、僕は推奨せずには居られないものである。

七五　盲目の人

目あきの人は、盲目の人に同情するが常である。然し世の中には、盲目の人が目あきの不自由に同情する人ある。

伊勢の老農とは云へ其實、日本の老農である、伊勢は河藝郡白子町の水原政次翁は本年八十二歳であるが、八十にして失明した人である。失明して不相變田畑に立ち、養女を指揮してゐる。百姓生活に浸たつて居るは、眞に難有い姿である。今回御大典に際し記念事業として、五穀栽培秘錄を著して今や天覽の光榮にも浴したのである。九月中旬に筆を起し、十月中旬に完成したいといふが、難有い事には失明の爲めに晝夜の別がなく、思ふ存分に筆を馳らせる事が出來たと云つ

て居るが、そう云はれると成程目あきの不自由を思はざるを得ぬのである。

翁の著述は子孫に殘すが爲めで、賣るが爲めではない。故に翁は志ある人に頒布して居るが、僕は特に一冊を貰つて同窓の勝川勝（今は光雅と改名す）君に贈つた、それは勝川君の失明に同情した僕の志であり、勝川君をも水原翁にせむ爲めである。

勝川君は農林學校在學中は、よく出來た人であつた。眞摯で同僚からも敬意を表せられた男であつた、卒業後は村の小學校に勤め、子女の敎育に從事し、一面に於て青年の指導にも努力した。やがて內外から認められ、陰然村ではなければならぬ人になつた。君が存在を認められると同時に眼が悪くなり、家庭の人も君自身も、僕等も平癒に最善の努力をいたしたが、年を追ふて見へなくなる許であつた、知ると知らざると同君に同情を表したが、君自身は案外平氣で、決して目の不自由を訴へなかつた。

遠山村は決して平和の村でもなく、よく治まつた村でもなかつた。其間、君はよく陰忍事に處し、精勵事に當り、遂に若い人達に自覺をさせた。君のために、村名が顯はせる如く、遠い山村であつたが僕は、幾度も往つた。若い人達と伍して村政の革進に、農業の振興にも微力をいたし

たものである。

勝川君は、原田村長の依頼によつて村農會長となつた、杖にすがりて村農會に出る姿は、眞に涙ぐましい限りであつた。然し君は目の不自由を意とせず、常に心眼を開いて指導に最善を盡くした統計をよく知つて居るのも君、之れを材料に改良を敎ゆるも君であり、目あきは何時も後に瞠若たらざるを得ないのでめる。

最近聞く所によれば、君の目は殆んど見へず、黑白をも分つ事が出來なくなつたと。僕は悵然として悲しみ、哀然として悼むだが、偶々水原翁に接して、餘計な心配だと悟り、目あきの癖に何等なす所なきを恥しく思つた。

唯水原翁は功なり名遂げて後の失明であるから、慰める節もあるが、勝川君は今働き盛りであるを思へば哀愁の情に堪へず、悲痛の思ひに囚はるゝも已むを得ぬとする。然し今日の醫術を盡くして癒へず、藥滋をとつて治らない以上、天命とする外はない、同時に心眼のあるを悟り、其視力によつて事を成すべきを悟るべしである。

世の中には立派な眼を以てよく物事を見る事の出來ぬもあり、一倍の眼力を備へながら見ねば

ならぬ事を見ないのもある。あきめくら、盲同樣とさるゝ人のあるを思へば寧ろ失明しても、心眼の明かなるを幸とする。

人の世に立つ道は曲折が多く、高低もあり、凹凸もある。時に風雨も來れば、雷霆もあり思はぬ災難に遇ひ、禍凶に接するが、世の常と觀なすべきである。唯人の志は奪ふべからず、心は移すべからずの境に入る事が肝要である。昔は塙保己一先生は盲目にして學者となり、今は水原翁失明して老農の態度をかへず、共に信念の强國を見るに足るとする。

人は世に立つべきであり、立たねばならぬが人である以上、事に當り、變に臨み漫りに心を動かし志を移す事なきを覺悟すべしとする。特に前途の遼遠なる若い人達には、波亂に遭遇する機會の到來が多い丈けそれ丈け、此邊の消息に適して居らねばならぬとする。之れ特に水原翁と勝川君の消息をものした所以である。

七六　齋藤勇之助君

昨年の總選擧の當時、茨城縣より僕の應援に參加して呉れた齋藤勇之助といふ人があつた。頭髪が長くて亂れて居り、顎の髯亦長く野草の如く、聲は銅羅をたゝく樣に響く、而も熱烈人を燒かねば置かぬ勢ひであるから、人呼んで『ライオン』とした。

齋藤君の生立ちは、正しく世に立つ道を人に敎ゆるものである。

栃木縣は黑羽根藩の士分の人の腹に宿り、癈藩置縣の變や、戊辰の戰ひに出遭ふた苦勞人を父とした。父は緣あつて、茨城縣は久慈郡佐原村に養子となり、君を產むだのである。

佐原村の養家の祖父は變人で、養子を取つて孫の顏さへ見れば、養子を離緣する癖があつた。君の父は二度目の入婿であつたが、君が生れると同時に離緣された。故に君は異父の兄弟を多く持ち、君は次男であつたのである。

叔父の志によりて中學校に入つたが、三百圓で卒業せよとの條件であつた爲め、君は學資を更に得むと小學校の準敎員試驗を、栃木縣で受けて及第した。爲めに栃木縣で小學校へ勤めて居つたが、雄志止み難く東京に走つたはよいが、懲戒免職となつた。

裁判沙汰までして遂に中學校の四年生に入學し、自炊苦學の功によつて卒業後は、軍人を志し

先づ臨時觀測所の技手に採用され、彼の日本海々戰當日の天氣豫報を出したといふ。

廿歲の時、一年志願兵となり野砲第十五聯隊に入り一年後、見習士官で除隊歸鄉したのである君は次男であつた爲めに、今の妻君の所に婿入を懇望されたが、話がきまつて六日目に君は入牢せねばならぬ事になつた。之れは君の在所に乞食が居り、醉ふて邪魔するを制止せむとして、君は臀を乞食にさゝれた。君の使用人は怒つて乞食を打懲したはよいが、之れが少々やり過ぎた爲めに、君は下手人として拘引されたのである。

事理明かになり出獄したのは、入牢してから二十二日目であつたといふが、今の養家では君を信じて居つた見へて、斯る事を問題とせず齋藤家に入婿した。

善中魔多しの諺にもれず、鴛鴦の契りも淺い時に養父と養兒の財產整理をする事になり、一時栃木縣に巡査とならざるを得なかつた。波亂の多い人生を味ふて、君は佛敎を研究して見る氣になり佛の信者となつた。當時銀貨の買しめや、銅貨の買占が始まつたので、其檢擧に努めた、生憎巨手が役人の間に延びて居り、君の檢擧を無駄な事にせむとするので、君は大に戰つたはよいが首になつた。

歸鄕して鄕土史を編纂せむとした、當時沈水と號して新聞記者をも兼ねた、偶々鐵道問題が起つてそれが政黨の勢力で消長するので、君は大に政戰場裡で戰つたといふが、道理で今でもそれらしい面影が表はれて來るのである。次で農學校の問題が起り、それにも奮鬪したといふが、恐らく當時の生活は高等遊民として遺憾なき活動をしたのであらう。

横井博士を招いて夏期大學をやつた所、博士は、農村を損ふものは羽織ゴロである。農村の人を誤るものは勞せずして、徒食するものであると說かれたのに、君は大に感激した。次で僕が往つて、農業經營を話した所農業で生くる道が明になつたと喜むだ、最後に友部の日本國民高等學校の加藤君を訪ねて、夫婦相伴ふて弟子入りをなし、初めて農業に對する信念と使命とに目醒め滿鮮旅行を共にして以來、經國の大道に猛進せむ臍をきめる事が出來たのである。

君は今、毎朝三時に起き、牛乳配達をやりながら朝起を鼓吹し、晴雨を論ぜず朝寢の人を起しつゝある。田は耕作し畑は打かへして桑を植ゑ、乳牛を飼ふて搾乳をなし、經營を多角形に進めつゝある。日にやけて顏は澁紙の如く、身は緊張してはりきれむとし、眞に生きた人らしくある。

人生は變化に富むと雖も、君ほど變化に富めるはあるまいと思ふ程、なんでもかでもやつたも

のである。然し今日になつて見れば後前坊主中奴の感なくんばあらずである。農に生れて農に悟る能はずあれやこれやとやつた後で、農に悟つて見れば、それが神聖である事も分り、やり樣で如何でもなる事が分り、農民に生きる事の使命の大なる事も分つて來れば、如何に働いても苦情が出ない許りでなく、反つて喜びを感ずる事になる。如何なる境遇に立つも、如何なる職業に從事するも、如何なる人の間に伍するも、勤勞の貴さに目醒めて來れば、人生の有難さを味識する事が出來、信念が得らるれば苦難を迎へて戰ふ事が出來、自己の業務の使命が分つて來れば、最善の努方をせねばならぬ事になるのである。

齋藤君の生立ちを叙して、世に立つ道を說く事にしたと同時に、齋藤君の奮鬪生活に敬意を表する事にする。

七七　一年前を回顧して

昨年一月二十一日議會が解散となつた當時、僕は群馬縣の北甘樂郡に居つた。所用をすませて廿四日の朝東京に出た時、新聞記者諸君から僕の立候補を知つて、其眞僞を疑がつたものである。廿五日の朝安城にかへり、驛頭にて卒業生並た有志の諸君に出迎はれて始めて、諸君により候補者に立てられた事を知つた。然し、僕は躊躇した、顧慮したが、諸君の誠意に動かされて、遂に

一、既成政黨には關係せぬ事。

二、選擧費は一文も出さぬ出されもせぬ。

三、政見發表の演說はせぬ。

との三條件を提出したが、諸君は寬容してくれたので僕は立候補者の一人となつた。

諸君が選擧の準備に忙殺されてると承知の上に、約束履行と言つて僕は福岡縣に行つて二月八日まで歸らなかつた。諸君は僕に歸れと催促をした、選擧事務長の大見君には、特に心配をかけたが、僕は歸らむとはしなかつた。諸君の厚意と熱誠に感じて、僕の友人、先輩、並に僕の申分に共鳴の人々は、遠近を論せず應援に來て呉れた、僕の知つてる人達は、全く寢食を忘れて運動を

してくれた。それが運動員であるとないとに差別はなかつたのである。

大垣まで僕を迎へたのは岡田安治郎君であつた。名古屋に下車して縣農會で宣言書をかゝしめたのも同君であつた。世間並に候補者らしく依賴の文句をかけと云ひ、一旦拒絕はしたが、諸君の熱心と誠意とに動かされて、依賴がましき文句を作る樣に折れたのも、諸君の運動を度外して長く旅に在つた事は相濟まぬと思ふたからである。

僕は言責を重んじ度い主義の男であり、當時は特にそうした氣分に充ちて居つたのである。又選擧界の腐敗惰落は、單に選擧權の行使が低級である許りでなく、候補者の態度が下卑るからであると思つて居る僕には、世間並の候補者の擬似は出來ないのである。僕の立候補には何等かの意義が闡明せねばならぬと考へても居つたので、僕は努めて選擧民の自由意志を尊重して、僕に投票を賴むとは云はなかつた。

或は僕を攻擊する、非難する、罵倒するもあつたが僕は何んとも思はなかつた。唯僕は僕の信ずる所に進み僕を信ずる人の信賴に依賴するのみであつた。此態度は、僕を險惡の地位に導き運動をしてる人や應援してる人の努力を水泡に歸するが如き形勢を招來した。僕の友人が忠告して

世間並になれと云ひ、松本君の如きは土佐半紙まで持參して、婉曲に選擧民に賴むと云へと慫慂されたが、それでも僕は露骨に賴むとは云はなかつた。當時を追想して、感慨無量であるは、獨り僕のみではないと信ずる。

二月十六、七日頃は萬事休すとの嗟嘆の聲を聞いた、二百人位は頭をそつて坊主になるとの噂をも聞いた。僕は腹では泣いたが、不相變投票は選擧民諸君の自由になさいと云つて居つた。つらかつた。苦しかつたがそれは主義に殉するものゝ覺悟すべき事である。

杉浦源七氏は愛兒を喪つて尙事務所を死守して居り。生田善市君は愛妻を喪つて尙且つ奮鬪して居る。相見ては泣かざるを得なかつた場面が、到處で展開されつゝある光景は、當時を追憶して感激に堪へざる所である。

悲觀された僕が第四區で最高點で當選した事は、諸君の賜である。諸君の努力が酬いられたのである。當時あの僕の立候補に絶對反對であつた、僕の家內が、喜むで一日食をとり得なかつた事は、如何に僕の當選が同志の間に喜ばれたかゞ分る程である。

臨時議會で何をやつたか、如何なることがあつたかは言はぬでも分つてる事である。又御大典

に參列しての光榮は云ふも愚かであるが、代議士として爲し認めらるゝ事があるならば、それは諸君の賜であるとする。

時は流れて、正に一周年、當時を回顧しては諸君に感謝の意を表せざるを得ぬので、玆に謹むで其意を表する。

七八　渡邊宗二君

東京の郊外、井の頭公園に近い所に三鷹村といふのがあり、其處に現在產業組合長を勤めて居る、地方の有力者である吉野といふ家がある。家に老夫婦に男の子が四人もある。地主階級の家であるが、おやぢは組合長、兄は郵船會社員、次兄は銀行員、三男の宗二君と四男とが百姓に從事して居つたのは時局の時であつた。

三男の宗二君は乙種農學校を出たばかりの若い百姓であつたが、よく農道を體得して側き目もふらず百姓をやつて居つた。彼が家を出るのは、生產物を賣るべく市場に行く時か篤農家を訪ね

る時ばかりであつた。

東京附近であるが故に、特に彼は野菜栽培に心がけ、とりわけ白菜の栽培にかけては拔群の手腕を示した。爲に東京府立農事試驗場より、白菜委託栽培を引受ける事になつた。彼は何時でも、反當八百圓の收入を白菜丈けで上げて居つた。

時局の當時、郵船會社に勤めて居つた長兄や、銀行員であつた次兄は、宗二君の百姓姿を見て馬鹿らしく感じた樣子であつた。親も宗二は氣がきかぬ男、鈍物と思つて居つたらしい。然るに一度不景氣が襲來するや、長兄も次兄も整理の名の下に免職になつた。馬鹿らしく見えた宗二のみは不相變愉快に働いて居り、面白そうに暮らして居るので、遂に長兄も次兄も今更の如く宗二が農道の上に、毅然として立つて居る姿が偉く見へ、景氣不景氣に超越して居る貴い勞働に頭を下げざるを得なかつた。

僕が彼を知つたのは其以前であつた。僕は遇ふ度に農道を說いた。農道に立つ者の貴さを說いた。彼村では百姓をつまらぬと考へ、農地を惜し氣もなく宅地にする。其間に處して儲けんとする觀念を宗二君が憤慨して、僕に講演を賴むだ事もある。僕の志と手腕とに敬服して、彼の努力

に光明あらしめむとして、彼の作つた白菜を大膳職に獻納する手續をとつてやつた。獻納の儀が許されて、愈々宮內省へ搬入する時、彼は親をして其名譽を得せしめ度しと申出で、爲めに彼の親の名義で親が自ら大膳職に獻納する光榮に浴した。親は有難涙を流して、一生一代の光榮に感激したとの事である。

彼はそうした床しい心を持つて居る青年であつた、故に誰云ふとなく宗二君は偉いと、鄕黨の誇りとする樣になつた。如斯して、彼は青年時代を去るや、あこそこより養子に懇望された。何にしろ三男であるが故に、親や兄に心配かけてはならぬと云ふので渡邊家に入籍する事になつた。それは一昨年の事であつたが、琴瑟よく和して、今日は既に親の身になつたと云ふ。

彼が養家の養父は小學校の校長であるから、人物の査定がよく出來たと云つてよい、彼は不相變熱心に百姓をして孜々乎として働いて居る。若い人達はよい着物も着て見たいが人情であり、酒の一杯も飲み度いが心理であるが、宗二君は百姓をして喜むで居る。彼の養父は今更ながら感心し、安心し、遂に敬意を表せざるを得なくなつた。近時聞く所によれば、宗二君の農業禮讚の態度に感じて、養父は退職を思ひ立ち宗二君と共に地に親しむ事になつたといふが、面白いではな

いか。

彼ほ自己を省てやましい所がない、腕には自信があり、胸には信念がある。故に何人にも接して意見の交換をやるから、比較的多くの眞面目なる人を知つて居る。彼の弟である四男は若い心の動搖で聊か心配であるので、彼が養子に往く事になると、弟を加藤寛治君の日本國民高等學校に入れて、其陶冶を賴むだが、果然彼の弟は人を改造して、今は宗二君に劣らぬ眞面目な人となり、宗二君の後繼者として吉野家の農事を背負つて居ると云ふが、之亦面白い事である。

如何なる境遇でも、強き信念の下に働く人は強い。如何なる職業でも、其職業を禮讃して眞面目に研究し工夫する人は偉い、如何なる身分でも、人情味を持つ人のする事は暖かい感がする。境を變へて移らず、歳月を經て變らぬは、必ずなす事のある人であり、功を上ぐる人でもある。世に立つ道は個中に存し、斯る消息に於て悟るべしとする。

世には渡邊宗二君と身分を等ふし、學歴を等うし、境遇を共にするがあると思ふ、其存在が認められ、價値ある生活をするは、豈に獨り宗二君のみならむやである。敢て、若き人達に則る所あれと勸める。

七九　飽き性の人

世に大功をなし能はざる人に飽き性で苦しむ人があり、それが隨分多いのである。人物は圓滿なる性格を備へ父母の力によつて相當教育をも受けて、役に立つ男と認められ、先輩知己もあつて就職難の今日でも、相應の地位を得る事も出來るが、同じ所に住むで同じ仕事を繰かへす間に何んとなく嫌氣が生じ變つた所に往く事を希望し、變つた仕事をして見度いと思ふ樣になる。時を經るにつれて其希望が嵩じ、其思念が增長すると矢も楯もたまらずなり、敢て其地位を棄て、他に轉ずる事に工夫をこらす事になる。遂には仕事に身が入らず、勤務に熱心を缺く事になり他にも怪しまれる樣にもなる。

辛棒も出來ぬ事になり、根氣がつゞかぬ事になり我慢堪忍も出來ぬ樣になつては、自ら地位を棄るか他から棄てられるか、二つ内の一は必ず實現する事になる。如斯して、他に轉ずる能はず變つた仕事にありつく事が出來ぬでは、勢ひ失業者の群に投じ、放浪生活に隨はざるを得ぬ事に

なる。斯くて、功半ばにして敗れ、業は成就せずして徒勞の感さへあるは、自業自得とは云へ、情ない事の限りである。

人にはなくて七癖と云ふから、何かの癖はあるものであるが、一定の所に落ちつく能はず、一定の仕事に安んずる能はざる癖は、蓋し惡癖である。思慮に富めるもの、分別あるものは、自ら性癖の矯正に努むべきである。苟も世に立たむと志す者は、須らく此處の修養を先決とすべきである。松平樂翁公の歌に

一方に心さだめよ小夜千夜鳥
いづれの浦か浪風はなき

とあるが、全く其通りである

西洋人は多く大功を上げる、大事を完成する、發明發見もするが、それは飽き性でないからである。終始一貫の功德に目醒め、有始有終の眞理を知つて居るからである。日本人は聰明の國民であり、優秀の頭腦をも持つて居るが、火山國に生れる爲めか、何事も永續せぬ點があり、やり遂げる信念を缺いて居るために、常に一歩を西洋人に讓らざるを得ぬのである。それ之を思へば

我國民の短所矯正の上からしても、飽き性は矯正せねばならず、永つゞきせぬ癖は改良せねばならぬのである。

就職難の今日、既に職務を有つてる人は、特に此邊の覺悟が大切である。前途遠遠にして、將に世に立たむとする人も、豫め此邊の覺悟をすべきである。今や、世に立たむとする人多くして而も用意を此處に缺くもの亦多きは痛嘆の限りである。

僕は東西に往來して、色々の人に面會し、種々の意見をも聞き、同時に樣々の現象をも見て居るが、飽き性に惱まさるゝ人の多きを見て、默視するに忍びず、敢て此言をなすものである。

八〇　智能の啓發

百姓は合はぬ引き合はぬ、儲からぬと云ふ世の中に百姓で合ひ、引き合ひ、儲かると落着き拂つて居るものがある。百姓をやつて名をなし、家を興し地方を引き立てゝ行く者がある。愛知縣の碧海郡安城町の板倉源太郎氏、岐阜縣の土岐郡瑞浪町の橋本敎示氏、千葉縣印幡郡富里村の大

竹宗一氏、長野縣上水内郡神郷村の和田豐作氏、新潟縣の中蒲原郡石山村の青木順平次氏、群馬縣勢多郡木瀬村の清水及衛氏等、數へ來れば際限なしにある。

此處に不思議な事は、それ等の人々は學問を正式にやつた人でなく、農學校を卒業した人でもない事である。何故に問學の徒に百姓で成名の人なく、子供の時から勞働にいそしむだ人に、興家興村の人が出來たかは正に講究すべきであると思ふ。

人には智能の泉である腦がある。智慧の源である頭がある。學者は腦は筋肉勞働によりて發達し、それは男子に於ては十六歳が尤も旺盛であると說いて居る。して見れば小學校を卒業して直に父兄に從ふて、農耕に從事するか、家庭に於て子供の時から、働かせられる人の頭腦が發達すると思はねばならぬ。昔の殿樣や金持ちの子供は、下女や下男にとりまかれ、筋肉勞働をする餘地がなく、働かぬ日暮らしをするが故に、頭腦は少しも發達せず、よい氣になりて居る裡に腦味噌は腐つて行く、之れ殿樣や金持ちの子供に馬鹿が出來る所以である。古來貧賤の家に英雄が出て、偉人が生ずるといふは、働かねばならぬ境遇にをかれて働くによりて、腦髓が發達すると云るべきである。之れを譬へば農業をするには土地を要する。故に尤も貴ぶべきは地力である。地

力增進には耕耘をするが第一である。深耕も必要であるが故に、賢き農民は必ず地力の增進に心がける。然し同一の土地に毎年收穫をすれば、地力は次第に衰へて來る、痔せて來る、それ故に肥培を忘れてはならぬことになる。然し何處までも、肥料でものを作るにあらず、とるに非ずして、地力によるが原則であるのである。世に立つ人、世に立たん人は、自己の腦髓丈けを賴むでは頭がつかれて來る。故に入れ智慧の必要を認め、此處に講學窮理の必要を見出すのである。

丁抹の國を救つた人々は、此處に立つて教育を小學校で一先づ打ちきり家庭に於て働かせ、十八歳になり疑問を持ち判斷が出來る樣になつた時、國民高等學校に入れて教育をやつたのである。然るに我國の教育は學校から學校へ進むのをよい事にし、教室の入れ智慧をするに專らにして、農場の實習や教場での作業を閑却して居る、故に入れ智慧のみ多くなりて、生來の頭腦が進まず、人の擬似はするが創設が出來ぬはそれが爲めである。

問學の人に非ざるも成名の人は、皆よく働く、子供の時から働いて居る、故に生來の腦味噌が發達して來る。加へて、閑になれば人の意見を聞き、進むだ所を見、雜誌や書物をも讀むで入れ智慧ともする。之れ入れ智慧が優れて生來の腦力が發達せぬ問學の徒に比して、立派な仕事をす

る所以である。地力のない所には、物の出來がよくない、肥料の力でものを作らむとするは危い、それと同樣に入れ智慧のみの力で世に立たむとするはむづか敷い事である。若き人々よ、問學の人々よ、此處に目醒めて、働いて汝の頭腦を進め、智能の啓發に遺憾なきを期すべきである。感ぜしまゝを綴りて、世に立つ道しるべとはする。

八一　村山勇君

稻の裏作として比較的多くの栽培反別を有するは、麥と蕓臺とである。米麥と云ふ丈けあつて稻作に最も研究が進み、次で麥作に就いても研究が進むで居る。農事試驗場でも、農學校でも稻作と麥作とに最も力を入れて居るが、閑却して居つたのは蕓臺であつた。蕓臺は極めて小粒であるが故に、收量が少く七八斗から一石五斗位が反當りの收量であつて、石價は二十圓內外であるので、最も薄利のものとされて居つた事は隨分久しい間であつた。然るに、近年蕓臺も馬鹿にはならぬと、人の注意を引くにいたらしめたのは、實に村山勇君の力である。

蕓臺の栽培で、天下に名を馳せて居つたのは、福岡縣の粕屋郡であつた、同君は同郡小野村の出である。相當の年配の人であらうと思つて過つて見れば、本年二十四になつた一青年である。此男が蕓臺の反當四石取に成功したのかと思へば、誰れでも一驚を喫する、彼が宮崎縣に聘せられて講話に行つた時、青訓の服を着て行つたので、出迎への人は彼を見出す事が出來なかつたと云ふが、さもありなむと思はれる。私が村山勇ですと、名乘りかけても信ずるものがなく、分つた後にも若僧と馬鹿にしたとあるが、そうであつたらっと思ふ。而も、彼の指導によつて、宮縣の蕓臺は收量を倍加したとある。驚くべき貢獻ではあるまいか。

彼は如何なる生立なりや、如何なる道程を踐むで成功せしやは、何人も知らむと欲する所であらう、僕は彼と對談して、彼の語る所を聞いて成程と感じたものである。彼の兩親は敬虔なる操守の人であり、爲めに家庭は極めて圓滿であり。彼の父は養蠶、彼の兄は畜產、彼は普通農業を分擔して、孜々乎として勤めつゝありと云ふ。彼は小學校時代に於ては腕白に於て有名であり、聊かもてあまされた男である。小學校を卒業して、彼の受持ちが定まると、何事をかなさではすまぬと自奮し、人が閑却してる蕓臺の改良に着手したと云ふが、彼の研究に入つた初である。研

究の結果は藁臺の增收が出來るのみならず、稻作に好影響を及ぼす事を知り、益々研究を進めたと云ふ。彼の顏には、信念の血が流れて居る。恐らく彼の成功は、其信念の力があらうと思つた。彼が研究の前に襲來せし幾多の困難、故障、誤解、失敗は、彼の信念によりて退散したに違ひないと認めた。彼は、禁酒禁煙を斷行して、青年の過誤に警戒してる事は、又以て彼の用意を知るに足る。彼は父兄に仕へてよく其道を盡くし、父兄は又彼の功を助成する事につとめて居るといふが麗はしい話である、彼は青年らしい元氣に富み、稚氣も持つて居るから、老農らしくて老農らしからぬのである。一言にして云へば、よく出來た男である。

世に立つ道は多けれど、着眼と努力と信念の三つは忘れてならぬ事である。世間が閑却して居つた藁臺に着眼し、努力の結果四石取に成功し、今や恐るべき信念の人になつたのは村山勇君である。碧海郡の六ツ美村農業補習學校が四石三斗のレコードを作つた事は、世に推賞すべきであるが、之も村山勇君に衝動を受けたものである。而も廿四歲にして、成名の人となるは村山勇君に限つた事ではない。世に立つ道にれ悟ば、誰れでも成功の榮冠を得る事が出來るのである。敢て問學の徒と若き農村の人に、反省と自奮とをすゝめる。

八二　恐るべきは借金

自作農や小地主の經營が最も困難であるといふが、彼等の中には確かに沒落するものがある。或は小作者に墮したり、或は都市に去つて勞働者の群に入つたり、或は腰辨に節を屈するものもある。

彼等の徑路を見るに、ぼんやりして居るが爲めに漸次生活難に陷るもあり、或は少々の財產を賴むで青春の慾求に驅られ、放縱の生活をした爲めなるがあり、或は子供の教育費のために行きつまつた結果のものもある。其の孰れにしても、共通の點は借金をして、それに苦い思ひをなし、果ては賣り喰ひ、破產倒產の厄に落つる事である。

世に出世の三毒とて、古來、借金、酒色、賭事の三つを戒めてあるが、最もるべきは、借金である。知らぬ間に利息が嵩まり、元より利が多くなるのが早い、貸し方は何時でも貸す時は親切に見へるが、請求する時には何の遠慮も猶豫もせぬもので、誰れでも借手は貸主の無慈悲を訴ふる

ものであるが、それは畢竟愚痴に過ぎない事である。

利息を眞面目に拂つて行けばよいが、借金する程のものは呑氣であるのか、放縱であるのか、油斷をする樣になつて居るのが、必ず利拂に不忠實であるが常である。愈攻めらるゝ樣になれば申合せた樣に整理を餘所事にして、借り代へ、遣り繰り算段に奔走する、中にはどうでもなれと自暴自棄に陷り、更に深味に陷るものあるは、憐れにも情ないものである。

元來が收入不足のために苦しむでの借金であれば、始から返濟が問題であるのである。眞面目に利拂をやれば、兎も角も追はるゝ事もなくてすむが、それ丈け眞面目になれぬが、借金する人の通弊である。恐るべきは借金であり、借金は身を亡ぼす基なりとあるが、全く其通りである。

僕は父が死むだ時、約八千圓の借金を背負ふた。父は臨終の時、御前に少しなりとも財産を殘すが親の務めであるに、借金を殘して氣の毒である、と申譯をされたのに、僕は財産があつては油斷をするのが人情である、借金があると奮發せざるを得ぬのであれば、僕はお父さんの御慈悲によりて借金を頂く事が出來たと喜んで居ます、と答へたが、父は滿足したらしかつた、僕は實際さう思つた。僕が謹嚴で質素な生活をなし、兄弟同志が助け合つて仲よく暮らしたのも、それ

が爲めであつたのである。

父が死去を境に、僕は二つの手段をとつたのである、一は身一つを殘して家財を賣つて仕舞ひ、新妻に承諾を求めて、嫁入道具の目ぼしいものも賣つて仕舞ふた、一は貸主を歴訪して、僕がした借金でない、父の借金を返濟するのであるから利息をまけて貰い度いと賴み、年賦償還の方法を講じて談判の結果、多くの貸主は僕の請求に應じて呉れた。其間、訴へられた事もあり、裁判所へ召喚された事もあるが、世間の同情によりて事なきを得たりして、思へば危い橋を渡つた感がする。

出來難いは、家産を思ひ切つて處分する事である。家柄を考へたり、家名を思つたりすれば、誰にもある虚榮心にたゝられて、面目を維持したくなる。それを思ひ切り、素裸にならぬでは浮ぶ瀬がないものである。僕は一面に借金の始末をなし、一面には兄弟の學資を支給したのであるから、隨分苦しい思ひをしたが、それが今日、どれ丈け活きた學問になつたか分らぬのである。

世の中には必ず僕と境遇を等しくするものがあらう、あるに相違ないと思ふが、周章してはならぬ、失望落膽を斷じてしてはならぬ。落着いて處理法を考へ、最善の努力をすれば必ず解決の道

が開けて來るものである。斯る場合に於てのみ借金は鞭韃の具となり、奮發の動機を與ふるものとなり、借金こそ身を興す基となるのである。カーネギーが貧乏の禮讃をやつたのも斯る意味に於てゞあると信ずる。

故に借金は恐るべきにあらずして、其性質によりけりであり、其原因次第であるとせざるを得ぬ。幸にして返濟の道があればよし、返濟の道がなければ、更生して勤勞收入に一生面を開くか家産があれば早い所で家産の始末をつける事である。低利にかりかへるも一方法であるが、それは隨分六つヶ敷いものである、貸主を一人にまとめるも一方法であるが、それも容易ならぬ事である。故に、思ひ切りが大切と心得て家産の始末をするが、先決問題であるとする。

故郷は離れ難い、去り難い、此土地は祖先傳來の土地だから殘したい、今更此家を片づけては近所に面目がないなどゝ云つて躊躇するは愚拙の極である。若しそれ、親類が心配してくれるだらう、友人が見殺にはすまいなどゝ、他をあてにする悪い量見である。どうかなるであらう、なる樣になるに任せると、捨て鉢になるは自滅する者であると知るべきである。

借金の爲めに出世が出來なかつたり、立身が妨げられたりする人の少からぬのを見て、同情に

堪へないが借金に處する道を辨へないものや、辨へて尙且つ斷行の勇なきは、全く困つたものである。それが出世盛りの若い人に在り、分別盛りの人にあるから、尙更遺憾とせざるを得ぬのである。特に、喰へる丈けの遺産を讓り受けた者、慾に驅られて眞面目にやつて居れば事なきを得る者で、油斷大敵の體驗者に墮するは、祖先の勤功を思はぬものであり、苦勞を察せぬ不孝者であるとする。

本人が爲めに世に立てなくなるは、所謂自業自得と觀すべきであるが、累を兄弟や、子孫に及ぼすは其罪決して輕しとせずである。而も世に、斯る人の少しとせざるは情ない事の限りであり、困つた事の極である。

時節柄、感ずる所あり、敢て借金の恐るべきを說いて、世に立つ道の道をしへとする。

八三　青年の奮起

近來、到る所で農村青年の奮起を聞くは、快心の至りである。

或は多收穫の研究と努力とに、或は農業經營の改善に、或は文化の施設に、或は農業勞働の武者修業に舊套を脱しての活動振りは、眞に目ざましいものがあり、青年の意氣を見るに足るものがあるは、我農界の幸之にすぎたるはなしとする。唯、問學の徒に、之等の清新の氣を見ざるは情なしとする。

若き人々が世に立つ道は多岐である。然し向上の意氣と努力とが第一要件であり、先決問題であるのである。老いて衰へるは意氣であり、努力である。故に青年にして意氣と努力とを缺くは若老であり、若衰である。青年の恥辱であり、面目潰しでもある。

今や、農村は振興せねばならぬ羽目に陷つて居り、舊套を脱出せぬでは助からぬ境涯になつて居る。而も農村振興の聲丈けでは助からぬ、農村振興の改善にのみ信賴して居つては、尙更助からぬのである。誰が考へても、何處で考へても、眞に農村を今日の窮地より救ひ出し、農民を今日の苦境より脱出せしむるは、唯、農村青年の意氣と努力に俟つのみである。

明治維新を招來し、若き　明治天皇を輔佐し奉りて立派な聖世を迎へたのも、明治の青年であつた。亡國に頻した難國を救ひ、新興の國家丁抹を造り上げたのも、當年の丁抹青年であつた。

故に昭和維新を完成し、明治聖世に劣らぬ明るい彌榮の御代を招來するも、亦昭和の青年であらねばならぬのである。之れと同樣に疲弊に惱み、困憊に苦しめる農村の現狀を打開し、希望に充ちて生き得る新農村を作るも、亦農村青年の手腕に俟たねばならぬとする。

其國の將來を知らむと欲せば、其國の青年を見よ、と云つた人があると云ふが、うがち得て妙である。よい青年が居る家は、やがて復興する。よい青年を持てる町村は、必ず更新する、よい青年が居る國家は、必ず興隆するは、古今に例が澤山ある。賴むべきは青年であり、賴まるべきも青年である。意氣と努力とに人生の花を咲かす青年は眞に自重すべきである。

青年が青年の使命と力とに目醒めて、意氣は天を衝き、努力は山をも拔かむ勢いで、法にふれず、道に迷はず、勇往邁進すれば、彼等の前途は必ず光明にかゞやく、世に立ち其存在を認められるゝに至るは、何の疑も語るに餘地はないのである。今日到る處に斯る青年の意氣と努力とを見るは、彼等を有する地方の幸であり、國家の幸であると同時に、亦彼等の幸であるとする。

それにしても、世に立たんと欲し、世に立つ道を求めて學校に學べるものにて、其意氣と努力とを見る事が出來ないのは、一體如何した事であらうか。教ふる者に熱烈なる誠意と努力とを缺

くは事實であるが、爲めに敎を受けるものが意氣地なしになるは、不甲斐なき事の限りである。文王を待つて起つは眞の偉人ではない、白樂を得て名馬となるは、眞の名馬ではないのである。嶄然頭角を顯はせば誰でも仰ぎ見る。何處に居つても存在が認められるではないか。

繰りかへして云ふ、若い人々の世に立つ道は、若い人々にのみ許された意氣と努力とに生きる事である。農村青年に、快心の擧を敢てするものゝあるを見て、特に若い人々に猛省を促す事にする。

八四　高松宮殿下御盛德の一節

高松宮殿下は海軍に御勤務あらせられ、世間では海の宮殿下と申上げて居る御方である。而も地方產業の御視察を思召立たせられ、賤が伏家をおいとひなく、實地の御見學に精勵の御德を示し給ふた事は、全く空前の事である。

如何にして斯程の智識を有し給ふや、唯だ驚くばかりである。廣汎の智識を各方面に發揮し給

ふは、吾等をして感激せしむる事が深かつた、特に農村の上に農民の上に、御仁慈の御意見を拜承しては感泣の外なかつたのである。

拜察するに、殿下は、見まい、聞くまい、言ふまいの御修養が、あらせられるかの如くに思はれる。つまらぬ事、爲めにならぬ事は、一切見まい、聞くまい、言ふまいを實行し給ふて居らるる樣である。其處に洗練されたる智識が得られ、無駄言がなくてすむ事になる。吾等は境遇からでも餘計なものを見、つまらぬ事を聞き、無駄口をたゝく。故に智識は混雜し、言行は拙劣な事をもする樣になる。殿下の御高德は天稟であらせらるゝは勿論であるが、御修養の功も亦多大であると拜察する。吾等は正に反省すべきであり、特に世に立たむとする若い人達は、此點に目覺めねばならぬとする。

殿下は御年廿五歲であらせられ元氣旺盛な御年ではあらせられるが、每朝七時に御出門、午後六時に御歸宿とは、全く恐れ入る御精勵である。農民と肩を並べて說明を聞こし召し給ひ、質疑は遠慮なく遊ばされ、野人の非禮を咎め給はぬ御態度は、唯有難く殿下をなつかしく思ふばかりである。

農民がよく働くと聞こし召し、『百姓ばかりがこんなに働いては、百姓は氣の毒ぢや、世間並にやつてよい工夫はないか』、と御尋ねになる。田植踊を御覽になつて『農村には斯る民謠ありや、働く丈けでは味がないと思ふが』と御意見遊ばされる。中島郡稻澤地方の大根切干の製造を御覽になり、『こんなに長いものを作つても味には變りはあるまいね』と問はせらるゝ反面には難有き思召が拜察される。お茶や活花の教授をすると聞こし召されて、『農民に斯る事を敎るはよい、營利に汲々乎として居る丈けでは、生活に餘裕がなくて面白くない』と申される。『此處には三百卵の鷄が居りますか』　と問はせられて、營業者を激勵遊ばされ、洋服の學生を御覽になりて田舍は洋服をきぬ方がよいではないか』と流行を戒め給ふ。清洲の菠薐草を御覽になり、『菠薐草は榮養價値の高い蔬菜であるそうな』　と申され、食滋に深き御思召の一端を示さる。『此のあたりでは、稻の品種は何種位栽培して居るや』と御尋ねになり、產業組合の事業を御覽になつては、『今少し共同を徹底的にやる譯には行かないものか』　と御意見遊ばされ、案內を承はる者に緊張の態度をとらせ給ふあたりは、恐れ入つた事である。

海の宮樣は、今回の御視察によつて、國本である百姓の宮樣であると、恐れながら申上げる

程、全國農民に深い感激を興へさせ給ふた事は、眞に難有い事の限りである。

殿下の御盛德の一端を傳へるは、若い人達に殿下に則りての修業をすゝめむが爲めである。つまらぬ事は見まい、聞くまい、言ふまい、の修養こそ、世に立つ人の心得である。信條である事を、殿下に扈從した僕は、若い人達の前途を祝福すべく、言はざるを得ぬのである。

八五　積善の修行

近來、關西の或名門が倒れた、其處の主人は、祖先の勤功によりて出來た財產を私するに忍びずと云つて、或は學生の世話をしたり、或は孤獨の人を助けたり、或は公共事業に寄附をしたり善事とあれば、如何なる盡力をも厭はなかつた篤志家であつた。

親類の人の借金に名を借したばかりに、親類が倒れた爲に債權者に攻められ、彼は綺麗に自己の全財產を投げ出した。彼には八人の子供があり多くは勉學最中であるが、廢學の已むなき場合に遭遇した。それは親として忍びぬ事であるが、然し運命とあきらめるより、外はなかつた。加

之、家も土地も投げ出した以上は、墳墓の土地に居止まる事も出來ずなつた。思へば無殘の至り無情の限りであつた。

彼が倒産を知つて驚いたのは村民であり、舊知の人である。村氏は、彼が村を去るを悲しみ、先づ產業組合は彼の家を買ふて、其居宅を保留し、一部を組合事務所に改造し、彼を組合長に推擧した、有志家は彼の生活を保證する爲めに、彼をして郵便局長たらしめた。遠近を問はず、彼の急を知つた知人は、彼の子女のために學資の供給に盡力した。

突然に裸になつた彼は、彼の人格の光りで彼の前途を明くした、彼の人格の力で前途の凡てに保證を得た、遺產によりて認められた彼は、今や彼の人格によつて認めらるゝ事になつた事は、偉い事であり、立派な事であり、則るべき事である。

誰れでも、苦境に陷れば、昔し世話をした人にすがらむとし、助けてやつた人に賴らむとし、面倒を見てやつた人に酬ひられむとするものであるが、彼は斷じて斯る女々しき事をしなかつた。唯彼の友人、知己が彼の爲めに奔走し、盡力する厚意と努力とに對しては滿腔の謝意を表して居るのである。

古來、積善の家に餘慶ありと云ふが、積善の人にも餘慶ある事を、今彼の復興によりて知るのである。勿論、餘慶をあてにして積善はすべきでない、然し積善に酬ひらるゝものゝある事は、否定が出來ないのである。

思へば、世に立つ道は積善の修行であり、實踐である事である。己を空ふして他のためにはかり、己を後にして公共を前にするは、世に立つ道と悟るべきである。故に、小我を棄て、大我に生きる事、私的生活を公共公益の爲めに投げ出す事は、永遠に世に立つ道であるのである。

世に立たんとて心配する人多く、世に立つ道を求めて孜々乎たる人の多い世の中、道は近に在るを知らずして、反つて遠きに求むる者、比々皆然りとする、今日敢て世に立つ近道をと、彼の近狀を紹介した次第である。

八六　故加藤正市君

加藤正市君は安城農林の第一回卒業生であり、本年四十七歲の男盛りであり、分別盛りでもあ

つたが、一月十九日を最後に此世を去つた事は、痛恨に堪へない事である。

然し、同君の最後は立派であり、見事であつた事は他に類例がない程であつた。同君は最後まで種畜場の前途に就てのみ意見を述べ、遺言も此點ばかりであつた。僕に對しての遺言は、

奉公の加藤正市を先生は見舞はれたと信ずる、僕は種畜場を基礎として農業經營の改善に微力を輸して來た。今年より場長と共に農場を特別會計にして貰ひ、大になさむ覺悟であつたが、斯る身になつた事は殘念である。種畜場の事を御願ひする。

とのみ云ふた丈けであつた、如何に同君が渾身を種畜場に捧げて居つたかゞ分り、農業經營の改善に理想を有つて働いて居つたかゞ分るのである。

同君は在學中は、尤も眞面目であり、元氣であり、活潑であつた。人のいやがる農場實習によく努め、劍道には氣合の強い男で認められたものである。相手にいやな感を起こさせず、陰險なやり方は同人に見出す事が出來なかつたのである。

農會に、縣廳に所を異にし、職務を違へて働いたが、何時でも技術員の本務を忘れず實地の研讃に努めた事は、同君の手腕が特に認められた所以である。何時覺へたか分らぬが、魚をとる事

にかけては名人の域に達し、手品も巧妙で當業者を凌ぐものがあつた。種畜場に參木君が場長として赴任し、單に種畜場當然の仕事をするに止らず、農業經營の改善に進出し、同時に眞の農民を養成せむ事が計劃されて、主任を物色するに當り、特に選ばれたのが加藤君であつた、成程加藤君を措いては他に適任者はあるまいと、當時誰れでも考へたのである。それ程加藤君は適所を得たのであつた。參木場長は絶對に加藤君を信賴し、加藤君亦其信賴を裏切らぬ活動と努力とを敢てした、參木君と加藤君とは宛然水魚の交りであり、畏敬し合いつゝ助け合ふ關係は、見るものを感嘆せしめたものであつた。

僕は、初から相談相手になり、特に生徒の教育に付ては種々の意見を聞かれたが、要するに國民高等學校式にやるがよいと進言し、從來暇ある毎に講義にも行つたが農場に進境があり、生徒に眞劍の態度が見へた。參觀人が殖へ、視察員が增し、加藤君の出張要求が激しくなつて來る。種畜場を背景とする關係もあるが、有畜農業の有利を實地に見せたので、遂に種畜場は有畜農業の本山と認める事になつた、之れ、一に加藤君の功績として永遠に忘れてならぬ事であり、忘れられぬ事でもあると信ずる。

今や十五町歩の農場を特別會計にして、加藤君獨自の經營振りを示し、本邦農業經營に一生面を開かんとするに際し、突如として長逝した事は、種畜場にとりては此上もない打擊であり、參木場長の困憊は尤も至極であるのである。

種畜場の大黑柱として認められ、有畜農業の指導者として迎へられ、口も八丁手も八丁の男として重寶がられ、交る人に對しては厚誼の人として喜ばれた加藤君であつたが故に、同君の逝去は多方面に大なる衝動を與へ、其逝去を惜まぬものはなかつた。二十二日に行はれた葬儀は、全く心から同君を哀悼する人々が、遠近を論ぜず集り來り珍らしく降り來たつた雪にもめげず、哀悼の意を表した事は、稀有の盛觀であつた。如何に同君が多くの方面に交渉が有り、多くの人に關係があり、而も同君の存在が必要視されたかゞ分るのである。加藤君こそは死して餘榮がある男であり、瞑して往生が出來る男であるのである。

加藤君に學ぶ所は多い、特にそれ程までに男を上げた加藤君は、世に立つ道を踐むで居つた事を僕としては闡明せざるを得ぬのである。

加藤君は努力の人であつた。少しも勞を厭つたり嫌つたりしなかつた。加藤君は本務に目醒め

ての修養を怠らず、修行を忘れなかつた爲めに、技術の練磨に努めて倦む所を知らなかつた。加藤君は眞摯であり、何人にも城壁を設けず公明正大の態度を持したので、陰險は同君の尤も嫌つた事である。極めて責任感が强かつた。爲めに身命を捧げての活動を敢てしたのである。指導者の責務に自覺して、指導啓發には丁寧親切を盡くしたものがある。兒童走卒も亦同人を戀しく思つたのは之れが爲めであつた。

如上の心がけは、誰れにも必要であり、特に世に立つ人の尤も心得べき事である。加藤君の一生は若き人々へ世に立つ道を教へたかの如く思はるゝのである。

八七　公職に從事する者

公職に從事して世に立たむ者は、其存在の價値を認められる事が必要條件である。僕は自己の經驗よりして、左の條件を提唱する。

一、健康に於てまさる事

能率の增進は健康が根元である。

二、眞面目なる事

人に安心させる事が出來、信用される事になる要素は眞面目である事である。

三、專門によりて認めらるゝ事

學問の力、技術の力、經營の力、統制の力等色々あるが、其處に專門の功德が現はれねばならぬ。

世が開け、人智進み、文明の利器が殖へてる時勢であれば、不斷の努力と研究と工夫とがなければならぬ。若い人でも其處に用意がなくば、老齡の人に地位を奪はれ、若朽者と見做される事になる。故に、學校で勉强した辯を其まゝ利用し、社會を活きた學問の出來る學校と心得て、更に勇猛精進せねばならぬものとする。

若い間は記憶力に富み、老ひては區別力がすぐれて來る。故に若いとて自ら侮るべきでなく、老いたとて自ら卓下するものではない。常に時勢を見て進退を誤まらず、世の推移に鑑みて出沒を謬らぬ用意があれば、到る處青山ありである。

戒むべきは早くから待遇や給料に目をつける事である、待遇以上の價値があり、給料以上の力があれば、何處でも歡迎し、誰でも重寶がる。故に待遇以上の價値を發揚し、給料以上の力を出して働く事は其地位を安定にする事が出來る。

僕は、冬になつて火が珍重され、夏になつて氷が歡迎されると同樣に、時勢に逆行する事も存在の價値が認めらるゝ所以であると主張する。金に囚はれるものゝ多き時に、金に囚はれない人間になる事、利益に驅らるゝものゝ中に立ちて、利益を眼中に置かないで道の爲めに働く人たる事、勞働を忌避する風俗の中に、敢て勤勞努力をする人になる事などは、確に存在の價値が認めらるゝ事なりと信ずるものである。

尙人の忌む事、疑を招く事は斷じてせぬ事にせねばならぬ。古來、三毒と稱へてあるは、飲酒好色、借金がある。此三者は關係があり、連絡があるので、而も人間の嗜好物であるが故に陷り易く、溺れ易いものであり、特に若い時に其害が甚だしいものである。飲んでもしめくゝりがあり早く女房を貰ふか、女に近づかない用意をするがよい、特に借金は斷じてすべきでない。確實な人、堅實な人、用心深い人と認めらるゝが立身出世の方便であり、免職を避くる手段でもある。

明るい心持で人に接し、親切なやり方をするは誰れでも心得べきであるが、特に公職に從事するものゝ忘れてならぬ事である。地位を利用して奢つたり、奪つたりするものが公職者にあり勝であるが、決して長つゞきはせぬものである。同時に上の人に媚び、へつらふが如きは自ら侮るものであり、やがて人から馬鹿にさるゝものである。凡て公職に從事するものは無私奉公の誠を以て終始すべきであり、他を犧牲にするは禁物と心得べきである。

八八　門出

三月は會計年度の末であり、學年の終りでもある。故に一年十二ヶ月の中で、尤も事の多い月であるが、特に學年の末であるとして、各種の學校が卒業式を行ひ修了式を行ふ氣に多忙を極むるは今や年中行事となつたのである。

つい此頃までは、卒業式や終了式は芽出度い事に數へられて居つたが、今は入學難や就職難の脅威を受けて、憂き目、悲しき事を迎ふる日なりと解釋さるゝ樣になつた。之れは時勢の相違で

あると見ればそれ迄であるが、元來學問には修了があるものでなく、卒業に卒業がある筈がない事に悟れば、教育界に卒業式や修了式を行ふは、蓋し笑止の沙汰である。

世の習慣によりてやると云ふが常であるが、既に笑止の沙汰であると思へば、何處でも改めて然りとする僕の經營してる神風義塾では門出の式と稱へ、一ヶ年の科程をすませて塾を出る者に對しては門出の章を授けるのであるが、斯くする事が教育的であり、世に立つ道を知らしめる所以でもあるとも信ずる。全く、世には義務教育六ケ年をすませて、直に世に立つものがあり、中等學校の定めた年限をすませて、然る後に世に立つもある。準備をより多くし、より大なる力を蓄へんとする者は、更に高等學校に入り大學に進むもあるが、畢竟世に立つ手段であり、世に立つが目的であるのである。然るに、或は入學難に遇ふて遊民の群に入り、或は就職難に陷りて失業者となるは、學問修業の目的を知らざるものであり、世に立つ心得に目醒めざるものと云ふべきである。

人は食はねばならぬが、衣食は道の中に何時も存在して居る。道を辨へず道を踏まずして、徒に金を追ふが故に、業に從事する事が出來ず、職にありつく事が出來ぬのである。勤勞即生なり

と悟れば、勤勞するが人の道であり、働くが人の踐まねばならぬ道である事に、誰でも氣がつく筈である。働く事に滿足し、働き得る事に感謝が出來れば、入學難も就職難も問題にならぬのである。

世は開け人智進む今日、學校に入る事が出來ぬと悲しみ、職にありつけぬとて愚痴を云ふは、手段の爲めに目的を忘れたものである。故に人は常に守る所をもたねばならず、もたしめねばならぬのである。此意味に於て、卒業を行ひ終了式を行ふは、動れば人を害ふ事になる。故に僕は誰れにも分り易く、門出の覺悟を敎へて、守る所を知らしむる事にせねばならぬと主張するものである。

僕が今回神風義塾の門出の式に與へた門出の章は、

十ヶ條からなつて居るが、それは

一、われは人なるが故に向上に邁進せむ。
二、われは日本人なるが故に日本魂を磨く。
三、われは祖先を有する子として祖先を辱めざるを期す。

四、われは時即ち神なりと信じ時の裁判を待つ。
五、最後の一人はわれなりわれわれを守る。
六、われを動かすはわが心なりわれ我心を修む。
七、われを活かすはわが力なりわれ我力を養ふ。
八、われを進めるはわが理想信念なりわれは理想信念に終始せむ。
九、われは環境を有すわれわが環境をよくせよ
十、われは生命を貴ぶが故に農業を禮讃す。

これはわが神風義塾に學むだもゝのみが私すべきものでなく、世に立つ人々は誰れでも心得て然るべきものと信ずるが故に、敢て世に立たんとする人々に信條としてすゝめる。一片の卒業證書は糞の役にも立たぬもの、之れによつて世に立たんとするも難い哉である。

時節柄、前途遼遠の若き人々のために、僕の意見を述ぶるは婆心の存する所以である。

八九　水原翁を弔ふ

本邦唯一の老農水原政次翁は、四月五日を以て逝去した。農界の寶が一つなくなつた感がして痛恨に堪へない。

翁は德川の末から明治にかけて伊勢を代表して居つた故古市與一翁の門弟であり、從つて純農民で問學の人でなかつた。然し、事に熱心で、創設的の頭があり、研究心に富み、抱容の德を具へながら氣慨もあつた男である。故に嶄然頭角を顯し、後輩を凌いだものである。

三重縣の農事試驗場が創立さるゝや、翁は選ばれて初代の場長になつた。當時は稻作が專門であつた爲め稻作に對する體驗は爲めに大に進むだのである。其後農會が系統的に組織さるゝや初めは縣と兼務であつたが、後は農會專門の技師になつた。當時、二見に辻喜代藏翁あり、員辨に林李兵衛あり、何れも老農で世に推賞されて居つたが、稻作にかけては翁は第一人者に推されて居つた。

翁はよく人の世話をなし、後進を率ひて技巧に熟せしめ、其間何等求むる所がなかつた。努力不求は翁の態度であり、主義であつたらしい。故に翁は何時も家庭を解放し、寢ねて行くに任せ飲食するに任せて居つたが故に、何時も貧乏であつた。

然し、翁の志を繼承するものや、翁の術を傳ふるもの此處彼處に生じ、翁は到る處慈父を以て迎へられて居つた。其笑ふや大黑天の如しと雖も、其怒るや毘沙門天の如しであつたが故に、寬嚴よろしきを得た人であつた。

翁は六十一歳にして一切の公職を辭し、白木町の不毛地を開き、一町歩の小作百姓になり、一町歩經營に都合のよい家屋を考案した、當時、理想的の農家であると評判され、多くの人が視察に來たが、故加納子爵の如きは奥樣や小作人をつれて來たものである。五年を經、十年を經て、水原式農法は認められ、遠近列をなして翁の指導を翁の農場に受ける事になつた。

翁は一片の技術によりて農民は救はれずとし、心を農政問題に馳せ東西奔走して、農民の政治的自覺を促し、翁自ら一つの團體をも作つたことがあるので、僕は爲めに何度も引つ張り出されたものである。偶々以て翁の性格を偲ぶ事が出來るとする。

翁には子がなかつた、妻君の里の女を養ふて子としよい養子を娶る事に、自他心配したものである。養女おいしは男にまさる心身の所有者であつた爲め、遂に翁の瞑するまで養子は出來なかつた。おいし女は今四十五歳であるから、之からも婿に入るものはあるまい之のみ翁の爲めに遺憾とする所である。おいし女は必ず翁の事業を相續するであらうと信ずる。それ程に偉い女であり、盲になつた後の翁の事業はおいし女の援助であるのである。

老いて末の望み少い翁を勞せしむるは、友人知己の堪へざる所である。故に其後友人知己は門下生諸君と相談して醵金し、翁を自作農にした。翁は感激して更に農事に研究し、水原式稻作法を案出したが、八十歳にして失明した。然し、翁は屈せず撓まず百姓をやつて、見る人を驚かした、翁は周到の事である。今上陛下の御成婚當時翁は多年の功勞を認められ、藍授褒賞を下賜され、大正天皇の御葬禮にも參加を許された。翁は感激措く所を知らず、益々皇室に對して敬虔の態度を表示した。

今上天皇御即位の年、心から奉祝の意を表さむと、五穀栽培秘錄を書いた。それが十五日で出來たので驚いて聞けば、盲には晝夜の別がないので能率が進むと云つた事は、評判な話である。

知事も井坂代議士も之に感心して、天夜の覽に供し奉つたが、御嘉納の光榮に浴し、翁は見へぬ目から涙を流して喜むだ、翁の精力主義は、老いて相變らずであつたのである。

翁は苗の尖をなでゝ肥料の施し方に注意し、根に觸れて苗の引き方を指導し、草を握つて出來ばへを知つた事は、目明き連中も及ばぬものであつた。老農の眞骨頂は翁に於て始めて見るを得た觀があつた。

今春、妻君を喪ふて翁の心は寂しくなつた、風邪がもとで顯しく弱つて來た。周圍の人が何んと勢つけても駄目だと思つて居つたらしい。遂に四月五日を以て長逝したのである。

世に老農多しと雖も翁の如く終始一貫した人は少い、圓滿なる人格の發達は接する人をしていやな感じを起こさせない。翁の農法は何時も中庸を採つて進んだが政に、間違が少かつた。多收穫流行に際しても、翁は確實に穫る事を專一にすべしと云つて居つた。

翁は座禪を好み、煙草は飲むだが、酒は一滴も飲まず、晩年は歌を詠むで樂しむで居つたが、惜しい事には今や世には居らぬ事になつた。

九〇　山中雄三君

大垣より揖斐町に往く電車の途中に神戸驛てふがある、其處は電車で十五分間の所で、安八郡神戸町の入口である。其處に水呑百姓より立身して、今日は中産で而も面白い日暮らしをして居る山中雄三君が居る。

彼が生れた家は、貧乏のどん底生活を餘儀なくされた。小作農であつた當時を思へばゾツトする程貧乏も念入りの貧乏暮しであつたそうである。恐らく彼の父はそれを苦に病み、極度の勞働をしたのであらうが、無理がつゞいた結果、彼の父は病の床に臥したが、醫藥に親しむ餘裕もなくて、遂に歸らぬ旅を冥土にする事になつた。

父が働いてくれてさへ喰へぬ貧乏の中に、杖とも柱とも賴むで居つた父が死むだので、當時十七歳であつた雄三君は、失望落膽の結果死むだがよいと思つた。世に慣れぬ青年の事であれば斯る場合途方にくれて死を選ぶは蓋し無理もない事である。

雄三君は助かる事になつたと見へ、釋然として悟つた。二人前の働きをすれば、父の存命と何も變る事はないのである。百姓のやり方を研究して上手にやれば、父の存命以上の成績を上げる事が出來る筈である。何を狼狽してつまらぬ考を起したであらうか、と彼は彼自身を叱咤して奮然と立つた。

照る日も降る日も、彼は下腹に力を入れて働き、閑暇の時は農會を訪ね試驗場を視察して、經營の改善に油斷をしなかつた、年を追ふて成績は上り、月を重ぬるにつれて收入が殖へる樣になつた、中途にして小作爭議が周圍に起り、其仲間入を勸誘されたが、私には暇がないとて斷はつた。實際働く事に目醒めて一生懸命に働いて居れば爭ふ暇もないは當然の事である。亦以て彼の覺悟の程が分り、彼の奮鬪の程度が分るのである。爲めに一時は人外者とされたが、うるさい交際をせぬが、難有いと彼は一筋に努力に精進した。

小作爭議に脅かされた地主は土地を賣り出す、多年努力の結果蓄財をした彼は土地を買入れる斯くて十有七ケ年間に一町二反歩の土地所有者となり、年も年であり奮鬪するに內助者があつたがよいと、女房をも持つ事になり、今日では夫婦共働きで一段の能率を上げて居る。

聞く所によれば、貧乏に育ち、貧乏に鍛えられた彼は、働く事の功徳に悟りて閑暇を恐れ、收入の道にいそしむで買ふ事の無駄を戒しめて居るから、一町二反歩の米の收穫は全部貯蓄にし、生活費は副業の藁工品の代價でやつて居ると云ふが、之で禍を變じて幸としたものである。

或日、彼の妻君が新らしい衣服を新調せむ事を提議したので、彼は何の爲めかと尋ねた妻君は井戸端會議の決議を齎らして曰く、世間では山中さんは裕富にならしたが、あんな粗末な衣服をきて居るは女房が氣がきかぬのである、氣のきかぬ女房では相濟みませぬ、と。雄三君、それを聞いて汝は世間の女房ではない私の女房じやないか、私が默つて居ればそれでよいでないか、世間の噂を氣にしては限りがない、と妻君を戒しめたとあるが、又以て、彼の決心を知るべきではあるまいか。

世の中には、直面したる窮狀に閉口垂れたり、失敗に落膽して、前途を悲觀したり失望したりするがある。彼等は助からぬ人であり、救はれぬ者である、語に曰く、

成名常在窮苦之因敗事多因得意之時

と。窮苦の日に奮起し、發奮興起を敢てすれば、禍を轉じて幸となす。豈に山中君のみならんや

である。カーネギーは米國一流の富豪になつた人であるが、貧乏であつた賜であると、貧乏禮讃をしたが、異曲同功である。

世に立つもの、立たんとする者、須らく悟るべきであり、則るべきであるとする。

九一　岡本庄左衛門氏

佐賀縣三養基郡の基山村は、佐賀縣切つて小作爭議地であつた。爭議が勃發せむ時、僕は行つて其不利を說き、生產者の生くべき道を說いたのである。然しリーダーの指導よろしきを得たのか、農民の自覺が足らなかつたのか、爭議は惡化して放火事件を起した。可憐なる小作者から多くの犧牲者を出し、何の得る所もなかつた、苦き經驗を嘗めた時、再び僕は行つて善處する道を說いたものである。

此村には產業組合を脊負つて立てる梁井氏あり、組合中心の村たらしめむに懸命の努力をつゞけて居る。爭議に傷くる小作者を救ふは、產業組合の使命なりと、梁井氏は極力組合の利用を說

き小作者をして組合員たらしめた。然し、經濟上の進展には産業の發達が根抵とならねばならぬので、農會に物色してよい技術員を招聘する事にした。其選に當りて赴任したのが、岡本庄左衛門氏であつた。

岡本君は佐賀縣農學校の出身であり、多年技術者として經驗を持つて居るが、頑健鐵の如く、熱烈火の如き活動をするは、他に類例を見ざる所である。岡本君が赴任して、晝夜を分たぬ努力上下を差別せぬ指導は、紛擾の村を鎮定して仕舞ふた。年を重ね、月を積むにつれて、農民は農民の本領に目ざめ、農民として生くる道に立つた。特に耕作者を安心させ、耕作者を農耕の道に向上せしめた事は、顯著なる事實である。

昨年は、岡本君を永住せしめむとて、村民は同君の住宅を建て、四反歩餘の耕地をも供へて贈つた。人情紙の如く薄き今の世に、斯る特志を見るは、蓋し稀有である。而もそれが爭議の本場であつた所に見るを得るは、偶以て岡本君の活動振りを推察する事が出來るではないか。

世には農學校を卒業して技術者として起てる者が多い、而も岡本君の如きは少い。技術を認めらるゝものは多いが、其功績に感謝さるゝものは少い。生産をすゝめ、良品を得るにいたらしめ

た者が多いのも、岡本君は多くの篤農家を作つて居るのである。

同一の程度である農學校に學び、同一の職責に立つ技術者の中に、岡本君の如きが存在するは農學校卒業生の名譽であり技術者の面目である。僕は、岡本君に敬意を表し、新築の家に拙筆さへ贈つたのであるが、今日の農村を思へば思ふ程、同君の如き人を得む事を望むの情、痛切を加ふるからでもある。

技術者たるも亦世に立つ道である。農耕の術をすゝめ、買賣の術を改め、加工の技に上達せしめ以て農民を窮地より救ふは、技術者に待たねばならぬ事である。教育に惠まれざる、文化に浴せざる、無養の民を指導して世間並の人にするも亦技術者の手腕である。舊慣より脱出せしめ、陋習より解放させ、進むだ經營に立たしむるも亦技術者の責務である。

國亂れて忠臣を思ひ、家亂れて良妻を思ふと同樣に、農村の疲弊を見る時、良技術員を思ふは何んぞ僕のみならむやである。世人の期待に副ふて立ち、農民に要望されて活動するは蓋し人生の快事である。玆に岡本君を紹介するは、技術者として世に立つ人の多きを思ひ、君と同一境遇に立たん事を切望するが爲めである。希くば、世の技術者、岡本君の活動を味識せむ事を。

九二　青年の研究努力

世に立つ道は、人をして世に立たしむ道でもある。世に立たねばならぬは人の道であり、人をして世に立たしむるも亦人の道である。

不景氣が深刻なるにつれて、世に立てなくなる人が殖へる、國家の惱み之より大なるはなく、不祥も亦之より甚だしきはない。斯かる析柄、安價にして榮養に富める食糧を提供して、先づ食ふ事に困らぬ樣にするは、大なる功德あり、偉業である。

山形縣は東置賜郡吉野村字太郎に今年二十三歳の川合恒五郎てふ青年があり、自村が食糧に自給自足が出來ぬ惱みを見て、之が解決に着眼し、鋭意研究努力して、遂に川合式榮養パンの製法に成功して、目下山形縣には大歡迎を受けて居る。

此法は單に疲弊せる農村を救ふばかりでなく、一切の貧窮を救ふものであり、眞に人をして世に立たしむるものであり、同時に二十三歳にして世に立つたものでもある。

僕は山形縣自治講習所の修養道場に於て其人に接し、其努力によつて出來た馬鈴薯パンを味はふて、心から喜むだものである。時節柄の救濟法として、其製法を紹介すれば

麥　粉　一貫匁。　二等品。　馬鈴薯　一貫三百匁。

（甘藷なれば一貫二百匁）

大　豆　二百三十匁。　ワカメ　五十匁。

白砂糖　四十匁。　鹽　二十匁。

（甘藷の時は二十匁）　重　曹　十匁乃至二十匁。

以上大人二十四食分（一食百二十匁、三錢）

二、製法

大豆は數時間水にウルカシて食ひ加減にウデ、ワカメは湯にてよく洗ひ細かにきざむで用意する。

次に皮をむいた馬鈴薯をムシ（セイロ又は御飯フカシにて箸のたつ頃合を適度としてウラゴシ（針金製五厘目がよい）にてコシ（スリバチにてつぶしてよい）大きな鉢又はタライなどに移し

鹽と砂糖を混ぜ、薯のさめない内に麥粉をフリカケ〳〵二十分間程叮嚀に練る、之れから大豆とワカメを入れ、再び十分間程練る、それを適度の大さにちぎり、アンピン餅の樣に丸めて蒸せばよいのである。

之で夏は四日位、冬は七日位置かれるのである。

麥粉を練る時、炭酸曹達五匁位（粉一貫に付き）を入れゝばよく膨れる、然し何も入れないでも丸めたものをサマサヌ樣にして四時間以上、八時間以内も置けば、麥粉は薯と化學作用で自然に膨れる。

此青年の努力によりて、何處でも作れる馬鈴薯、比較的安價の馬鈴薯が、榮養食として採用されれば、我國の食糧問題は心配せぬでよい事になる。特に日本人に適當なるカロリーが得らるゝ樣に、又榮養がとれる樣になつて居るから、有難いのである。

若き人の研究努力は、單に己を立たしむるのみでなく、人をして立たしむる發明發見を促す事を思へば、何人も自己の潛在力に目覺めねばならぬとする。

九三　桑原彌吉君

東濃に橋本教示あり、西濃に桑原彌吉ありとするは、岐阜縣の誇りとする所である。橋本君は青年百姓とし、計劃的に向上しつゝある篤農家として、既に令名を上げて居る男である。

桑原君は揖斐郡鶉村の人であり、一町歩經營の自作農として模範を示せる男である。君は十七歳の時、父より七反歩を分割され、最小の家を建てゝ貰ふた。當時、君の父は大きい家を建てゝやつては希望が出來まい。狹くて困る家であれば建直しの希望に生きる事が出來樣、と謂つたとの事であるが、流石は彌吉君の父丈けあつて面白いと思ふ。君はよく働いた、眞劍にやつたので十八歳の時、君の父は、お前はよくやる、褒美に一町歩增してやらうと云つて、一反歩をくれた彌吉君は益奮鬪した、力行を敢てしたので、君の父は、お前仲々よくやる感心じやと、君の十九歳の時に馬一頭を與れた。君は更に勢を得て、益働いたので、君の二十歳の時、君の父は、お前一人では不自由であらう。よい嫁を貰つてやらうと謂つて、父の選擇による妻君を得た。此處ま

では順況であつた彌吉君は妻帶して深く考へたが迷ひであつた。女房を持てば子が出來る妻子を養ふに八反歩で面白くやつて行けるかと思つたが惑ひであつた。彼は親類で大阪に成功者となれる者あるに考へ付いて遂に大阪の親類を訪れた。彌吉君の家庭を知つて居る親類、秩序の立つて來た時勢を辨へてる親類の人は、痛く彌吉君の不心得を叱し、速に歸鄉して農耕にいそしめと諭した。彌吉君は請ふて一週間大阪をめぐりて形勢を視察したが、親類の人の言の眞實なるを悟る外はなかつたので、彼はをめ〳〵歸鄉したのである。暫くは煩悶した、苦惱もしたが、よい考へもなかつた、斯る場合には懸命の努力は出來ぬが常であり、故に前途を悲觀するも亦常である。

當時、岐阜縣には小作爭議が勃發して、農村には暗雲がたなびいた。地主と云はず、自作と云はず、小作といはず、農民は皆不安に脅かされた。彌吉君は益々悶々の情に堪へず、快々として消光せざるを得なかつたのである。

僕は縣農會の懇請によつて揖斐郡に於て、農村振興の講演をやり、農民に自助の道ある事を力説した事がある。其時彌吉君は聽講者の一人であつたが、僕の話を聞いて、君は夜が明けた感をなし、前途に明かに曙光を認めたのである。彼は奮然として當年の彌吉に復活し、農業經營に沒

頭して、全身全靈をそれに打込むだ。間もなく彼は、年收千五百圓を得る事になり。農業によつてこそ自由が享有され、獨立の生活が出來るてふ信念に生きた。

一町歩と云へば類例の多いものである。一町歩の耕作によつて、自由獨立の生活が出來るものなら、百姓に落付くがよいとの信念を人に與ふる事が出來る樣になり、今日此頃は君の經營を見るべく、視察者は門前市をなして居るのである。

彌吉君も偉いが、の君父は更に偉かつた。或時、驚くべき雷雨か襲來した。若い彌吉君までが逃げ歸つたのに、彼の父は不相變田に立て仕事に夢中である。負傷があつてはならぬと、彌吉君は父を迎へに出たので、父は漸く歸つて來たが、彌吉君を捉へて曰く。

武士は戰場で打死をすを名譽とする、百姓は田圃で倒れるが本望である。雷雨に恐れて逃げ込むは卑怯である。然し、わしがお前の云ふ事を聞かず、雷死をしては子供が何をして居つたと世間の人はお前等を惡口するであらう、それはわしとしてはお前等に氣の毒であるから、歸つて來た。

と云つたとあるが、何んと農民の覺悟を立派に說明してるではないか。此の親にして此子あり

と云ふべきである、彌吉君が父の話を善く聞いて悟つたのも、蓋し無理からぬ事である。

世に立つ人々に取つて以て考察すべき資料とせよ、と敢て云ふ。

九四　虛禮を排す

僕は一切の虛禮を廢する事に心がけて居る、虛禮を間世並と心得てやれば、大切な事に力が拔ける事も世間並となる。世に立つ道として虛禮の廢止を心がくべきであり、それを勸告すべきである。

僕の所に多くの人から年賀郵便が來る、見る內に珍らしい人の消息を知る時、年賀郵便の功德を知る。中には近狀を報告して來るもあるが、之亦難有い感がする。故に年賀郵便は全く虛禮とは云はぬが、中には虛禮に過ぎずと思ふのが大部分あるを遺憾とする。僕は年賀郵便は出さぬ事にして居る。家族が親類に出すのは默視して居るが、僕は一切出さぬ。實は出したがよいと思ふ中には出さねばならぬと思ふのもあるが、東奔西走に寧日なき僕、原稿に追はれてる僕には、そ

れを書く丈けの餘裕がないので、出し度くも出せない。加ふるに虛禮を廢する意志があるから、強いて出す氣持になれぬのである。

今年の年賀郵便の中に、長野縣は上水內郡神鄕村の和田豐作氏より來たものは、大に我意を得たスローガンが書いてあつた曰く

農村恐慌擊破のスローガン

一、吾等は內省猛察以て陋習を打破し、生活費を節し、生產費を低減し、大に獨立自衛の策を樹てませう。

二、吾等は農業の本質を究明し、其經營に、其組織に、其栽培飼育技術に、其生產物の販賣戰法に、創造的の腕を振ひませう。

三、吾等は農民唯一の據城たる農會及產業組合によりて、鞏固なる結束をなし、一には尊農攘賚の大旗の下に、合法的の農民運動を以て、其權威を護暢し、二つには農業政策の上に生きんが爲めに、正々堂々の陣を張り其進出を期しませう。

と。簡單ではあるが、農民の正に覺悟すべきを遺憾なくかき綴つてある。個中に農氏が農民とし

て生きる道が闡明され、生き得る道が明示されて居る。

和田君は嘗つて二十年計劃を樹て、理想信念に生きて成功成名の人となつた男であるが、其言ふ所に無駄がなく、する事も無駄がなく、立派に世に立つた人であるが故に、世に立つ道を說く資格を有つてる男である。特に、農民の權威を上ぐる心懸に生き、農民の面目を全ふする用意に終始してるは、當世稀有の士であるのである。

景氣不景氣に超越すべきが農民であり、物價の下落によりて動搖せぬ農民の態度であるとし、作物の選擇に際しても、

必需品は値下げ

工業原料は値上り、値下り

嗜好品は値上り

と觀察して、必需品より二種、工業原料より三種、嗜好品より三種を選擇して、多角形の農業組織を採用して、常識ある農業經營をやつて居るは、蓋し、農民道に立てる農民の面目、躍如たりである。

年賀郵便を利用して、如斯自他を警戒し激勵するは、世に立つ道として心得べき事である。一錢五厘の葉書代は安價のものであり、少費多効を實行する事も出來る譯である。虛禮を廢すると同時に、儉の德を發揚する心懸けは、世に立つ道なる事を說く事とした。

九四　人の力

人の力は何處まで出るものか、進展するものか分らぬものである。其力に目醒めて、自己の力を自由に自在にするが偉人である。

熊本縣は鹿本郡の農業技術員に河邊眞子男といふ男がある、熊本縣は鹿本郡農會の技手であるが出勤前に、何時でも六反歩の茶畑の手入をしてると云ふが、偉い男である。

熊本縣の菊地郡西合志村に合志義塾と云ふがある、工藤左一平田一十氏が四十年間經營の修養道場である。其處からは多くの人材が輩出して居るが、今回文部省より表彰されし、菊地東部實業學校の中心人物の後藤安治君も、其處の出身者である。河邊氏も合志義塾の出身者であるので

意志の極めて強い男である。見るから身體も頑丈であるが、意志の強固であるが特色である。茶畑六反歩と云へば何んでもないが、六反歩の始末をするは、眞に容易の事でない。

僕の神風義塾に茶畑が二反歩ある、除草の時に精一杯の努力をして漸く一反歩の除草がやつとである。其體驗よりして、河邊君の努力の容易ならざるを知り、其精力の尋常でない事をしみ〴〵感ずるのである。

氏は自己の體驗よりして、興村興郡の計劃を立つたが、體驗よりの計劃には無駄がなく、必ず成功するものと思つた。

教育の功德は心ず非凡の人を生む、合志義塾の教育は斯る人を多數養成した事を思へば、今神風義塾を經營せる僕には、強い衝動を得た感がするのである。

教育は人の力を養ひ、人の力を充實させ、人の力の偉大なるを感ぜしむる所に、大なる功德を見出すものである。僕は河邊君の奮闘努力の功績に、今更ながら教育の効果を知ると同時に教育の功德を擧げねばならぬと痛感した。

由來、熊本縣には偉い人が出て居る、元田永孚先生、横井小楠、横井時雄、横井時敬、德富蘇

峰、德富蘆花、清浦奎吾、今の安達内相、數へきれぬ程の人物を見るが、今後は農界に人を出さねばならぬが、農業縣の熊本縣に必要の事である。其さきがけをしたのが河邊君であるとする。

人の力は何處まで出るものか、底知らずである程、人の力は偉大である。世に立つ人々は、人の力の偉大に意識して、其力を養はねばならぬ事を勸告する。全く今日の日本國は、人の力で局面展開をせねばならぬとするが故に、特に、人の力と題して力の人である、河邊君を紹介したのである。

九六　久保田全翁

僕の家内の父は、去る三月三日八十七歳で死去した。姓は久保田名は全と云つたが、一生を通じて全を盡くした人である。戒名に、成家に、成功に、成後に遺憾なき一生をとげた人である。

貧乏士族に生れた爲めに、郡書記をやつたり、小學校の先生をもやつた事があるが、何處でも謹嚴であり、眞面目の執務をして、變はる所がなかつた爲めに、漸次信用を得る樣になり、中途

にして市會議員ともなれば、縣會議員ともなつたが、謹嚴なる性格は毫も變はる事なく、眞面目の氣質は一貫して居つたので、政界に居るを面白からずとして實業界に入る事となつた、金澤に電氣會社を起して其社長をつとめ、朝鮮に農業會社を設けて模範的の經營をなし、老齢尙且奔走する所があつた。其謹嚴なる性格は從事する事業の信用を高め、眞面目なる氣質は自ら眞面目なる人を吸收して、事業の堅實性を加へ、する事なす事、爲めに可ならざるはなしであつた。

謹嚴なるが爲めに、放縱は絕無であり、眞面目なるが故に不節制は皆無であつた。旗席に出でゝも社交の範圍を出でず、酒を飲むでも亂に至らず、生來の弱きを知りて養生に專心し、寒暑に別なく忙閑の差なく、守る所に忠實であつた。それは見るものを敬服せしめ、聞く者をして驚かしめたものである。

己を守る事質素、而も慈善に餘財を吝まず、家庭生活は簡素、而も他を遇するに厚く、子女を敎ゆるに嚴ならず、而も自ら行ふて化するの慨があつた。故に接する人盡く服し、子女亦成人して盡く一家をなすに至つた。

子女は、一女五男であるが、一女は僕の家內であり、長男は法學士、次男は工學士、三男は陸

軍少佐、四男は陸軍大尉、五男は農學士で、今や盡く家庭を持ち乃父の氣質をうけて、將來が囑望されつゝある。兄弟は馬鹿に睦しく、兩親に仕へて從順、父母を顯はす事に努めつゝあるも、亦珍らしいものがある。

五日に葬儀が行はれたが、告別式に集まりし者千五百名、金澤では空前の盛葬であつたと云ふが、以て故人の聲望を知る事か出來るのである。古より人間の價値は棺を蓋ふて然る後に知るべしとあるが、故久保田全翁は群をはなれての人間價値があつた人でありし事が、愈明瞭になつた譯である。

死して成德院釋了全居士となつた故人の、ありし世の生涯は此でつきてる樣に思ふ。それにしても、謹嚴なる性格の尊い事と、眞面目なる氣質の偉い事とが、如何に世に立つ道として學ばねばならぬ事かが、分るのである。翁は學歷のある人でなかつた、特種の技術を持てる人でもなかつた。家格や財產のある人でもなかつたのに、信用されて地位を得、財產をつくり、子孫を得たのは、一に翁の謹嚴なる性格と眞面目の氣質とによつたものであるを思へば、人格の力の偉大さが分るのである。

公人としての翁は棺を蓋ふて其人格の偉大さを偲ばせて遺憾なしであるが、私人として家庭の世としての翁は、事に珍らしい慈父であつた。謹厳なる性格は子女をして寸分の油斷を許さなかつた。然し子女をして各々其志す所を遂げしむるに親切であつた人は、痒い所に手がとゞいた感があつた。六人の子女が各々壽を全ふし各々家を成し得た事は、全く慈父としての翁の功績であるのである。

由來謹厳なる性格は正しき道を踐まねばならぬ様にし、眞面目なる氣質は善事を擇ばねばならぬ事とする。翁の關係せし事業が盡く成功し、翁が老いて後悔なきを得たのは、それが爲めであると信ずる。

金澤に在住して名を成せし人少からずと雖も、多くは晩年が面白からず、其後に暗影を見るの感があつたのに、翁の如く晩年が美はしく、而も往生を安樂にしたものは稀有であるのである。まして翁の分身である子女が、各々僕の名をなしつゝあるは、蓋し類例のないものとする。

翁は僕の家内の父なるが故に接する所多く、從つて教へられた事も亦多かつたのは、僕の今日を輸たした理由の一として忘れてならぬ事と肝銘して居る。僕は親戚の多として人く語るを欲せ

ず、叙說を自由にする不便を有するが、然し、翁は立派に世に立つた事であるは、周知の事實である。而も其謹厳なる性格と眞面目なる氣質とは、翁の尤も長所であつた事丈けは、世に立つ道を說く者としては特筆せざるを得ぬのである。

僕は比較的早く父を喪ふた丈け、それ丈け久保田翁に信頼した事が多く、教へられた事も多いので、翁を見る事師父の感があるのである。世に立つ道を自行して教を垂れし事は、僕の私するに忍びざる所であるまゝ、此處にものして同志に示す事にしたのである。

九七　久野庄太郎君

知多郡の名物として久野庄太郎君を數へるものがあるほどに庄太郎君は有名な男になつた。

彼は十七八歳の時までは、都會に憧憬た世間並の青年であつた爲めに、彼の父君は篤農家として近所の人に認められたのに、彼は父君の偉い事も、難有い事も知る由もたかつたのである。

偶、名古屋に出かける途中、盛裝の若い夫婦が、大道を歩みながら僅の金錢問題で爭へるを見

て、都會は外觀はよく見へるが內容のないものだと觀察し、彼は釋然として農人の生活に目醒めたのである。それから以後の彼は全く別人の觀があり、心定まつて氣盛なりてふ諺の如く、元氣よく田圃に汗をしぼる事になつた。

父君も篤農家であるからよく働く、彼は年が若い丈けそれ丈け猛烈に働いた。彼は年頃になつた爲め、父母は嫁をと詮索したが、誰云ふとなく、久野に嫁に行けば殺されると、風評は遠近に流布して、容易に嫁さんは見つからなかつた。

彼の近所に慾の深いおやじが居つた、久野の家に嫁に行くがないので久野では困つて居る。斯る所へ娘をやれば、嫁入支度はせぬでもよからう。役に立たぬと出されても、嫁入支度に代へて牛をつけてやれば、牛が肥へて戻つて來れば損はないと思ひ、彼は久野家に自分の娘でよくば嫁にやらうと申込むだ。慾の深いおやじの家庭に人となつた娘であるから、よく働く癖がついて居り、體格もよいので、庄太郎君は喜むで貰ふ事にした。

嫁入りて後、妻君になつた娘さんは、庄太郎君を助けてよく働く、親子仲よく兄弟睦しく、春風が何時も吹いてる樣な久野家に來た事を喜むで、氣持よく働くので、庄太郎君とは羨ましい程

夫唱婦隨の生活をして居る。娘をくれたおやじは、今日は歸つて來るか、明日は戻つて來るだらうと待つて居るが、歸る樣子もなければ、うはさもない。其內に夫婦の愛の結晶が出來たと聞いておやじは失望落膽したとあるが、それは久野家が、如何に働く家であるかを說明する、話の樣子であると思ふが、兎に角面白い。

庄太郎君は今や五町歩を經營し、有畜農業で經營に範を示して居る。彼は、私は儲ける爲めに働くのではない、面白くて働くのである。故に採算した事はないから、何程金が殘るか分らぬ。唯だ農業の經營をすゝめ、耕地を擴張したのであるから損はして居らぬと思ふ丈けである。强いて收人を勘定せば四千圓はあるだらうが、そん數字を知つた所で面白くもない。樂みは働く中に在つて、それは金錢で購はれぬのである。幸福も働く事が出來る間に生れ、金錢で求められぬものである。親子仲よく、兄弟睦じく、夫婦和して、御互にまめに働く事は、人間至上の快樂であり幸福であるのである。儲けて何を求むる、金を貯へて何とする、ひそかにに至上の快樂に酣り、幸福に浸りて面白く働く所に、私の生命を認めて居るのである、と何時も萬丈の氣焰を吐くのである。

彼は兩親に仕へて誠に孝行であり、兄弟は見る目も羨ましき程睦しく助け合つて居り、夫婦は相信じていたわり合つて居る故に、家庭は圓滿であり、春風靄靄の觀がある、全く彼等の境地は世上の極樂である事である。

庄太郎君は教育に惠まれざる青年である、而も一朝釋然として、農人生活の幸福に目醒めて以來、何人も追從を許さぬ至上の幸福を享受して居る。彼の主張は哲人の聲を聞くが如しであり、彼の生活は眞に人生の幸福を獨占してる觀がある。人一度其道に目醒むれば、年の老幼を問はず、世に立つ道を自得する事が出來るてふ事は、庄太郎君が尤も雄辯に說明して居る。

問學の徒に迷惑の人多く、財産家に生れし人に幸福を味はふもの尠きを思へば、彼の悟りは貴きものであると同時に、世に立つ道を求むる事は須らく則つて可なりとする。

物質によつて幸福を求むる人の多い世の中に、精神的に目醒めて、人間至上の幸福を享受する庄太郎君は、學ばずと雖も學びたる人以上である。學びたる人にして煩悶し、苦惱するものは、須らく彼の今日を學むで可なりと、敢て云ふ。

悟れるものは强くもあり、氣樂でもある。學問をして迷ふものは、其愚を悟らねばならぬもの

と思ふのである。

九八　久松義一君

農民として異邦に新天地を開拓するは、蓋し若い農民の志す所である。安城農林の卒業生で、異邦に異彩を放てるもの尠からずと雖も、久松義一君の如きは特筆すべき人の一人である。

生徒の時代より辛棒强い性格を持ち、忍耐力に富むで居つた君は、卒業後、名古屋の資本家に採用されて渡鮮し、京城府外の蘭芝島の開拓に從事した。資本家の退却、韓江の出水、農場の破壞等凡る難事は君を襲ふて止む時はなかつた。或は家庭的に惱み、事業の經營難に陷り、或は生死さへ疑はるゝ悲境に立つた事もあつた。然し久松君は驚きもせず、狼狽もせず、周章もせず、不相變の顏を見せて居つた。艱難汝を玉に成すの諺は、君の爲めに作られたものゝ樣に思はざるを得ぬ心持もした位であつた。

色々の經驗により、常に新しい運命を開拓して止まざりし君は、今や薄荷の栽培に全力を傾注

し、製油事業をも營みつゝあるのである。本年は二十町歩の植付をなしたとあるが、君の居る所は屢水害に見舞はるゝ所で、平生は乾き切つた所である。久松君は度々の水害に遇ふて撓まず屈せず、遂に耐水力の強い作物として、薄荷を見出したのである。

朝鮮としては全羅南道と黄海道と久松君とが、百五十町歩の朝鮮薄荷を背負ふて居る。而も朝鮮の薄荷は極めて有望である事を、自己の體驗よりして唱導しつゝあるのである。何をやつて居るか分らなかつた久松君は、今や薄荷の久松として認めらるゝ樣になつた事は、君が獨自の奮鬪の賜であり、君自ら開拓した境地であるのである。

孤軍奮鬪は勇士の面目であり、繁根槎節を分つは利刀の價値である。熊澤蕃山ではないが、

憂き事の尙此上につもれかし
限りある身の力ためさむ

の氣慨を以て世に立ち、惡戰苦鬪して勇氣いや增す人でなくば成功成名の人になれぬ事は、誰れでも知つて居るのである。而も知つて行はざるが爲めに、徒に苦を訴へ、難々愚痴を云ひ卑怯の振舞をなすもの滔々乎として流をなす今日に、久松君の毅然として世に立つ態度は、全く立派な

た男振りである。

君は尙春秋に富むで居る、小成に安ずる男ではない。事業は必ずしも安全でない、まして水害地として憂ある所に於てをやである。然し、辛棒强い久松君の性格は變るべくもない、根氣强い君の心は奪ふ事は出來ない、堅忍持久の君の主義は枉ぐべくもない。君こそは人の世に立つ道を敎へつゝ世に立てる男であるとする。

九九　堪苦受難

古より『困難汝を玉にす』とあり、繁根瑳節分利器ともある。世に立たむとする者が、苦を迎へて自ら堪ゆる力を誡め、簇出する困難と戰ふて、身心を鍛錬する工夫あるは、蓋し當然の事であると思ふ。

故品川彌二郎氏が、松蔭吉田先生の松下村塾に學びしは十七歳であつた。村塾に宿泊して自氣せし日々の食事は、豆腐の糟に鹽と水とを混ぜ、それに一握りの米を入れたものを、炊いたもの

であつた。松蔭先生之を氣の毒に思はれ、自分の御菜を時々分與されたとあるが、一寸眞似のならぬ苦學の狀態である。

松蔭先生が玉木先生の膝下に敎を請はれし時、もの覺へが悪いとて玉木先生の怒を買ひ松蔭先生と机とを引きかゝへ、庭へ放り投げられたとあるが、如何に當時の學風が峻烈嚴肅であつたか想像さるゝと同時に、問學の徒が苦學をしたかゞ分るのである。

苦學そのものが無上の學問であり、修養であるは、可愛い子に旅をさせとの俗諺に徵して分るのである。受難の中に、口授によりて悟る事の出來ぬものが體驗されるのである。故に孟子は天の大任を此人に降さむとするや、必ず先づ躰軀を試し、其筋骨を勞し、思ふ通りにならぬばかりでなく、する事なす事が思ひに反する樣な事にする。それに堪へ、それを忍ぶ樣な事でなくば、大なる使命を授けぬものと說いて居るが、全くそれに違ひないのである。

成名は常に窮苦の日に在り、成功は多く受難の時に因るとは世に立つものゝ覺悟すべき事である。衣食に苦なく、學問修業の傍道樂を敢てする連中が、或は失業し、或は就職難を訴ふるは、寧ろ當然の歸決である。まゝに自暴自棄に陷り、世を呪ひ、人を怨み、不逞の事を敢てするが如

きは、自ら墓穴を掘るものであるのである。

今日の農村は窮乏の苦を迎へつゝあり、受難の時であると評判されて居るが、經濟的に見れば氣の毒な感がする。然し精神的に考へて見れば、農民が世に立つ道の開鑿であるとする。窮乏の苦を迎へてこそ奮發が出來、受難によりて努力を新にする事が出來るのであれば、今正に農民が躍如として奮鬪を敢てすべきである。

彈丸墨子の如き丁抹は、亡國の憂き目に遇ふて奮然として立つた。我國は國難に際して敢然として立ち、維新の大業に成功したものである。堪苦によりて勇氣が釀成され、受難によりて工夫が助長さるゝのであれば、我國の農村が疲弊し、農家の困憊するは、農民の子弟に名を成し、功を成さしむる天の配意と見ねばならぬのである。實にや、今日の成功農家は多く堪苦の經驗に富むものであり、成名の農民は受難の洗禮をすませたものであるのである。

乍遺憾、今日の學風は餘りに呑氣であり、だらしがない。敎へる者に熱もなければ誠意もない敎へ子の機嫌をとるを能事とするものさへある。故に自ら蕃山を學むで

憂き事の尙此上に積れかし

限りある身の力ためさむ

の氣概と受難迎苦の修業をなすに非らずんば、世に立つ道に登る事は出來ぬとする。

今日の農村に成名の人はある、成功の人も亦あるが、彼等の多くは學問に惠まれざる人であり教育に有緣の人ではないのである。科學的に進歩せし今日に於て、科學の修養ある學校出の人が案外なす所なく認めらるゝ者の少きは、堪苦受難の覺悟と鍛錬を缺くからである。堪苦受難は活學の人たらしめ、逃苦避難の徒は死學の弊に陷るは、世の古今を論ぜず、洋の東西を分たぬ事である。

敢て堪苦受難を高唱するは、同學の徒をして世に立つ道を辨へしめむが爲めである。

一〇〇　光澤金一郎君

僕が明治三十二年大阪府立農學校に赴任した、其翌年信州から三人の青年が入學希望で大阪に脱走して來た。曰く、安野善五郎、岡島悅雄、光澤金一郎。僕は其行爲に感心出來ぬものを認め

たが。其志を憐むで願書を受付てやり、試驗の結果入學を許し、僕は保證人になつてやつた。

當時は各府縣に農學校が普及して居らざりし爲めに、各府縣より大阪農學校に入學した者が多かつた。遙〳〵大阪まで出かける連中は、當時青の年中でも氣骨があり自信があつた。就中、光澤金一郎君は尤も其稜々たるものであつた。

今でも僕が忘れんと欲して忘る事の出來ぬのは、毎週土曜日の午後に光澤君は僕の住宅に來て掃除をしてくれた。先生の宅に來るものはあるが、家事を手傳ふものはなかつた、それ丈け斯る行爲をするものは、大勢から疑はれたものである。光澤君は誰が何んと云ふが、何んと嘲らうが善事をなすに何の憚る處あらんやとの信念の下に、斷行貫行したものである。此の信念こそ、光澤君の一生を貫きて、同氏の人格を光彩あらしめたのである。

白面の書生には珍らしい事であると思ひ、多くの教へ子の中にも僕は其成人を待ち、其活動を期待したものである。愛知縣農會が各郡に技術員を設置する時、僕が人選したので同君を愛知縣農會に採用した。當時は多く大阪農學校の卒業生と福島蠶業學校の卒業生とを採用したので、當年の信州組は盡く採用したのである。縣農會では初めての試しであり、僕の注文が六ケ敷いので

多くは屁古垂れた様であつたが、光澤君は平然として事にあたり事蹟を上げたものである。

僕が縣農會を世話してる間に、光澤君は信州に強要されて去つた。光澤君の行く所必ず僕は懇請され、同人の事業を助けたものである。然し、到る處必ず事蹟を擧げたのは同人の人格と手腕とによるは勿論の事である。

今日では各地組合製糸が流行してるが、其模範を示したのは同君の力によるのである。同人が鄉里の爲めに奮鬪し、組合製糸でなければならぬと奔走盡力せし當時は、涙ぐましい話が澤山ある。同人は產業組合の指導者として下伊那郡には忘れる事の出來ぬ人であるは、恐らく同郡民が異議なき事であらうと信ずる。

功成り名遂げた形で、一意居村市田村組合を始め公共團體の世話をして居つたが、去月高松市に於ける全國產業組合大會に出席せむと、正に出發せむとする際に俄然腦捻轉を起して重體となつた。沈重大地の如く、冷靜氷の如き同人は、死期を悟り直に組合の幹部を招集して組合精神を注射し、軍人會の幹部を招來して軍人精神を警告し、村の行政代議兩機關の人々を懇請して村治に忠言をなし、最後に　陛下の萬歳を三唱して絕命せしと云ふが、如何にも光澤君の最後であつ

らうと首肯する事が出來る、死に直面して驟がず、死に接して從容公共の事に遺言する態度は、如何に考へても光澤君の人格を偲ぶ外はないのである。

同人は親に事へて孝、兄弟に友、唯妻君を喪なふて悲嘆せしも、後妻に人を得て家庭は圓滿であつた。僕は屢迎へられて同君の家庭の人となつたが、何時も春風の感があつた。子息既に長じて、之亦有爲の青年であると聞くが、亦以て同君が用意を知るに足るものとする。

圓熟の人として正に活動新ならむとして、突如として逝く、哀悼の極である。然し、同人の行爲を見た人には、同人に到らむとする人少からずと思ふ。生きて公共に盡悴し、死して尙儀衷を示す、偉なりと謂ふべしである。同人の死に際しての態度は、同人の人格の最後の光であり、輝きでもある。世に立つ人は正に則るべきであり、學むで達すべきであるとする。

一〇一　片岡晴次君

安城農林出身で異彩を放てるもの少からずであるが、片岡晴次君は特に色彩の明瞭なるもので

あり、世に立つ道を闡明しつゝある男である。

君は知多郡小鈴鹿ケ谷村坂井の産で、在學中は子供らしい溫厚の人であつたが、卒業後片岡家の養子となつた。如何にも養子になる人らしくあつたので、適才適所の感があつた。

片岡家は東京呢町の成功者であり、取引所界隈では今日なくてはならぬ人であるのが君の養父である。儲けたものが贅澤をして暮らすも、事業をやつて暮らすも、どうせ死ぬるのは同じ事である。故に自分は、聊かなりとも、國家の爲めになる事業をなさむと決心したのは、君の養父の覺悟であつた。

越後の岩船郡は女川村に開墾を企てゝ行き詰れる人から、其事業を繼承して三百町歩の開墾をなす事となり、其衝に當つたのが晴次君である。大小の樹木が繁生する所を開墾するは容易の事でない、人力でやつて居つては能率が上がらない。其處で外國より來た抜根機を用ひて、本式にやつたのも君であつた、其後、何人も試みなかつた火藥で、爆發する事を試みたのも君であつた。其處までの決心をなし、大丈夫と見定めるまでの君の用意と努力とは、當事者以外には想像の及ばぬ事であつた。

如斯して今や略二百町の開墾が出來、百町歩は立派な水田となり、移住民も二三戸定住した。斯る事業には勿論政府の補助はある、然し政府や縣廳相手の仕事は、尋常の者では堪へられぬ面倒があり、厄介な事であるが、晴次君は陰忍持久して徐々に事業をすゝめた。移住民を容れてはよく地方の風習を調査し、自他を誤らぬ用意をなし、今は山形縣の庄内地方と富山縣地方よりのみ募集して居る。其用意の周到であり、着眼の凡ならざる所に、晴次君の性格を偲ぶ事が出來るのである。

成功者の養子であるが故に、東京の牛込には立派な邸宅を持つて居り、妻子は東京に住むでは居るが、體は月の過半は女川の開墾事務所に、移住民と變らぬ生活をして居る。三百町歩の開墾事務所であれば、誰が想像しても相當の設備を有するものと思ふが、見た所は移住民の家よりも粗末な建物であり、婆さんの炊事で弟君と一緒に寢食し、夜を日に次で一意開墾の進捗と移住民の幸福の爲めに奉仕の生活は、眞に涙ぐましいものである。

片岡家の事業は多方面であり、君の兄さんは目下總務格であり、君の次の弟君も一方面を分擔し、其次の弟君が開墾地を背負ふてやつて居るが、凡ての事業に君は關係してるので其忙はしさ

は、亦想像に及ばぬものがあるのである。然し、君はよく片岡家の主人たる權威をもち、裁斷を明かにし、勇往邁進する所に、何人も安心が出來る自信を示しつゝあるは、僕の敬服する所である。

君子容貌愚なるが如し、とあつて、晴次君は風采の上がらざる男である。用のない場合は默々乎として居るから、經綸抱負を窺ふ事が出來ぬ。故に、一見何處のおやぢかと思はるゝばかりであるが、其處に君の面目があるのである。

金錢を追ふ事餓鬼の如き社會に居て、金錢に墮せず、快樂を求める百鬼夜行の裡に居て、快樂に超越し、一意財の利用に注意し、一度決心すれば陰忍持久目的の爲めに邁進する、而も用意を周到にして功にあせらぬ所は、明かに世に立つ道を窮行して示すものである。君の行動に對しては成功を祈る必要はないのである、偉なる哉、旺なる哉。

一〇二　賴雲祥君

賴君は臺灣は臺中州東勢郡東勢の人で、夙に臺灣總督府の農事講習所に學び、業終へて選ばれて安城農林學校に留學し、第九回の卒業生になつたのである。

何處でも學問をすれば官界の人たるを希ひ、月給取をよい事としてそれを望むが、特に開けぬ所に於て其傾向が甚しいのである。獨り賴君は民間の事業家として立つ覺悟をなし、臺灣の林業が見る影もない狀態に着眼して、其處に成名成功の人たらむ理想信念を確立したのである。

幾多の困難と戰ひ、支障と鬪ひ、陰忍よく事に處して、今や十八ケ年の努力の結果は、臺灣唯一の林業家と認められ、直接經營の山林面積は六百町歩に達し、共同經營に屬するもの亦六百町歩ありと云ふが、其經營は學者の說に盲從せず、官廳の指導を盲信せず、君が獨自の研究を基礎として多角林業を行ふた所に、今日の成功の一端があるのである。

適地適樹をよく守り、バナナ、桐、油桐、松、竹、杉、福州杉を混植して、既に十年を經過し

たものは、臺灣には珍らしい人造林をなすに至つて居る。隣地は營林署の經營であるが、見る影もない不成績であるは、餘りに皮肉の觀がする。宜なる哉大日本山林會總裁の梨本宮殿下より表彰の光榮に浴し、遠近視察する者多く、君を請ふて指導を受けるもの亦多く、學者も亦君の所說に聞く事となつたのである。全く君は手腕によりて活動の天地を開拓し、他をして啓發する所あらしめつゝあるは、蓋し偉觀である。

君は卒業後將來を考へて內地人を妻に迎ふる事とし、東加茂郡は大沼の人を迎へたが、異境に內助の功を上げ、立派に內地婦人の功を上げたが、一子を殘して他界の人となつたのは、賴君にとりては非常の打擊であつた。今は本島人を後妻にして、瑟琴相和して居るが、賴君が前妻を思ふの情厚く、內地に來れば必ず展墓し、其家族を見舞ふ親切は內地人にも稀れなる行動である。君は亦恩義を思ふ心深く、美林の中に父母並に後見をした人に對する謝恩の碑を建て、僕の世話になつたとて僕の碑まで建た事は、他に例のない事である。君は新君にの信仰する鄭成功の廟をも造らむとして居るが、斯る敬虔なる態度こそ、君の成名成功の因であるとする。

今回僕が渡臺を期とし、故大森謹平氏に對しても、彼等同志が謝恩のため紀念品贈呈の式を上

げたが、君の志は同志をも動かして、見る人をして感激せしめた事は、蓋し近來の美擧であつたと思ふのである。

君の事業は尙半であり、君の社會的貢獻も亦之からであるが、僕は君の將來を保證するに躊躇はせぬものである。何んとなれば、君はよく世に立つ道を知つて居り 道に立ちて事を行ひつゝあるからである。君の着眼は國家的であり、君の行動は忍恕よろしきを得て居り、陷り易き自我に囚はれずに居る。

僕は同窓の諸君、並に愛國の人達と共に、賴君の前途を祝福せざるを得ぬのである、君の事業の彌榮を祈禱せざるを得ぬのである。

一〇三　板倉源太郎氏

日本デンマークの愛知縣碧海郡を訪れるものは、安城町大字今の板倉源太郎父子を訪ねぬものはない。碧海郡の板倉か、板倉の碧海郡か、碧海郡と共に名をなしつゝあるは板倉氏である。

板倉農場の經營には四大方針がある。夫は

一、大面積の經營——經營面積は約四町二反歩

二、肥料の自給と地力增進——有畜農業

三、經營の複式化——多角形農業

四、技術の研究

であつて、之が爲めに不斷の收入が上げ得らるゝ事になつて居る。即ち

一月　里芋、蔬菜　三、四月　仔豚　五月　蔬菜、甘藍　六月　成豚　七月　小麥、西瓜

八月　西瓜、紫雲英種子　九月　梨　十、十一月　梨、仔豚、成豚　十二月　蔬菜

鷄卵　年中收入あり

米　臨時販賣す

農場の收支概算を見るに

昭和元年度

收入合計　九、五八七、〇〇圓

支出合計　四、五八七、〇〇

差引　五、〇〇〇、〇〇—利益

昭和二年度

收入　八、五〇四、〇〇

支出　四、二六〇、六五

差引　四、二四二、三五—利益

昭和三年度

收入　七、二四四、四一

支出　三、四〇一、〇八

差引　三、八四三、三三—利益

昭和四年度

收入　七、二八九、九八

支出　三、八八九、八二

差引　三、四〇〇、一六―利益

昭和五年度

牧入　六、〇八五、五〇

支出　二、五九〇、八九

差引　三、四九四、六一

全く板倉氏には不景氣もなければ、不況もないのである。其内容を檢討する時に、何人も經營上則るべき所を知り、農業經營上の要諦を悟る事が出來るのである。

同氏は明治元年の生れであり、貧家に育つて人知れぬ苦勞をなし、今日に於て想像も及ばぬ難儀をしたものがある。多くは勞働者となつて働き、人に使用されて苦慘を賞めたのであるが、其間貧弱の體軀であつたが、よく堪へたのみでなく、自己の責任に忠實であつたのである。其處に人として世に立つ道が踐まれ、出世の端緒を得たことは、板倉氏をして今日あらしめたものである。今日に至るまで、同氏は舊主の恩を忘れず、國の恩、天皇の恩、佛の恩を難有く感謝してるが、此處でも世に立つ道を立派に踐みつゝあることが分るのである。

人の世に立つ道は色々あるが、若い時に困苦欠乏に堪ゆる修業をすることと、自己の責任に忠實を盡くして終始一貫するは、何時でも、何處でも、誰でも世に立つ道を教ゆるものである。板倉氏は正に其人であり、今日成名成功の人となつたのは、全く世に立つ道を踐むだればこそである。

身分の高下は問題でなく、財産の多少も亦論外である、唯だ人は世に立つ道を辨へ、其道に立つことによつてのみ、成名成功の人たるを得るのである。

一〇四　石川理紀之助翁

明治の二宮尊德翁として、獨り東北で認められし人丈けでなく、九州の一角までその感化を與へた。農界の巨人として、先づ秋田縣の故石川翁を推さねばならぬのである。

翁の若かりし時、人物と手腕とが認められて縣の採用する所となつた。翁は一日農村に出張して改良の必要を說いた。其言切々として人を感激せしむるものがあつたのに、其處の農民は御說御尤と思ふが、改良するに資本が入用である、それが私等にはないと、翁の說を是認して而も之

を行ふ意思なきを表明したので、翁は躬行以て之を率ゆるの必要を認め、官職を辭して飄然姿を隱して仕舞ふた。翁は空拳虛手身體一つで山こもりをなし、落葉を拾ふて賣り、樹下に雨露を凌ぎ、飢渴と戰ひ、數年にして一小農として立つて出た。なせばなる、なさねばならず、何事もならぬといふはなさぬなりけり、を實行して見せたのである。爾來、何人も翁を信じ、翁の云ふ所行はれざるはなく、翁を崇敬する人達は翁の主張に從ふ樣になつた。故に一時は翁の勢力、縣を壓する程であつた。

翁は寢て居て人を起すな、を標言し、躬行實踐の要を說き、辯口に巧者な徒を忌避し、官職をふり廻はす、連中を排擊した。爲に翁は學者や役人の容るゝ所とならず、不遇の場合もあつた。然し翁は動搖せず、焦慮せず、益行ふ所に忠實、主張に熱心であつた。

翁は一年の貯蓄は勿論、數年の貯蓄をなして、恒產ある者の態度を示した。翁は適地適產を提唱し、土地に適するものを選擇して作らねば、勞して功なき事を主張した。翁のなす所は盡く計劃的であり、　　の確立であつた。

翁は餘技として歌道に親しみ、研鑽深く、遂に歌人の堂に入り、農人生活にも餘裕があり、閑

日月のあるを示した、何れの方面から見ても立派な人であり、堂々として巨人の風貌があつた。

秋田縣は我農界の鼻祖である佐藤信淵翁を出した所であるが、其處に石川翁を出した事は偶然でないとする。秋田縣は、故森川源三郎翁を出し、故齋藤宇一郎氏を出したが秋田縣の篤農家としては、誰でも石川翁を推す事に不同意はあるまいと信ずる。

一〇五　富山縣の太田仙十郎翁

富山縣は同じ米產地である北陸道でも、米作上手で有名な所である。一時は他府縣へ原種を出したものである。今も尙米作指導に他府縣から聘せらるゝ人もあるのである。

同縣の縣の財政も町村の財政も、亦個人の經濟も米作によつて支配さるゝのである故、同縣にとつては米作より大切な事はないのである。之れ同縣の篤農家と云へば、米作に手腕があるものばかりである所以である。

太田仙十郎翁は人格と手腕とによつて縣に採用されたが、同人は單に技術上の指導をした許り

であく、農民の本領を悟らしむべく、特に農道を皷吹したのは、太田翁の非凡を示したものである。僕が今日農民道を提唱して居る丈けそれ丈け、翁の先見を推賞せざるを得ぬのである。尙翁は富山縣産米の聲價を高むべく、米穀檢査の必要を力說し、他府縣に先じて、檢査制度を布かしらたのも、翁の功績である。

翁は農民の指導に巧者で、卑近な話をなし、歌つたり笑はしたりして農民を納得せしめた手腕は妙を得たものであつた。故に翁は農民に歡迎せられ、厄介な問題も翁によつて解決出來たものである。故に翁は縣よりも重用され、翁も亦縣の施設を助けたものである。

翁は一見粗野、只の百姓としか思へなかつたが、話し合ふて見れば、談論風發の慨があり、自ら行ふ所に堅い信念を示し、漫りに人に屈する事をしなかつたので、自ら畏敬の念を人に抱かしめたものである。

今日富山縣には數多くの篤農家がある。米の高田庄藏氏紫雲英の高坂氏など其尤も著名なものであるが、皆太田翁の後輩である。

一〇六　石井仁三郎君

我國が餘りに住み心持がよいので、國外に出るものは畢竟國內に歸る事になる。移民に成功せず、殖民に成績を見る能はざるは、それが爲めである。毫灣に行つて見れば、年を經るにつれて內地人の事業は不振に陷りつゝある、朝鮮に行つて見れば領臺當時と今日と著しき人口の相違がなく、氣候のよい南鮮に比較的多いが、北鮮には官公吏の外には見る影もない有樣である。特種の權益を有する滿蒙に行つて見ても滿鐵の從業者、公吏、軍人を除けば、海外雄飛の壯圖に躍進してるものは、指を屈する程しか居らない。

吾等の祖先が有せし理想は、明治の御代に實現したのはよいが、子孫が理想を繼承してより大なる理想に生きられぬでは、大和民族の本領は喪失する譯である。それは民族滅亡の前程であり亡國の兆でもある。

我が權益が侵害されて敢然として起つはよい、國威を傷つけられに懲膺の軍を動かすもよい、

然し權益の擁護は其處に多くの同胞が行き、我同胞彌榮に增加し、牢乎として動かすべからざる勢力を植付けねばならぬのである。其處に我同胞が腰を落付け、骨を埋め、子孫に事業を繼承せしむる事が出來ねばならぬのである。

石井仁三郎氏は農大實科の出身者であり、夙に新領土の經營に志して渡臺した。或は試驗場に或は講習所に、努めて事績を殘したのであるが、後進に道を開くべく退職して以來、園藝業に從事して不相變活動をつゞけて居る。臺灣に骨を埋め臺灣に子孫を永住せしむる覺悟をしたる氏は勤め先に於て責任を負ふべき仕事をしたので、氏の信用は厚いが當然である。

特に氏の用意に於て敬意を表すべきは、內地人が他所に出ると當年の意氣がつゞかず、從つて働く事が退歩して、賃銀の安い勞力を使ふ樣になり、爲めに挫折する弊に陷るまいと覺悟し、何時までも人一倍働きつゝある事である。

氏は五人の息子を有つて居り、長男は臺灣農大を卒樣して大學院に學びつゝあり、他は中學、小學に通ひつゝあるが、氏はそれ等の子供をも思ひ切つて働かしめつゝある。而も働いた分量に應じて賃銀を拂ひ、それを貯蓄せしめて、將來獨立の資とする樣に奬勵してるが如きは、極めて

周到なる用意と認むべきである。

氏は臺灣に深く事業の根を下ろし、渡臺せし人々に則る所を知らしめ、斯くすれば、到る處靑山ありの境地に立つ事が出來ると、躬行範を示しつゝあるは、全く敬服せざるを得ぬ事である。

海外雄飛は我同胞が理想でなければならず、權益擁護は我國家の國是でなければならぬ事を痛感する今日、石井氏の如き人を臺灣に見るは、氣を强ふするに足る事である。

二男三男の人々は、內地に齷齪するものではない、須らく臺灣に、朝鮮に、滿蒙に、新なる活動の天地を開拓すべきである。身輕な二三男の世に立つ道は、海外雄飛であり、新領土の權益擁護に任ずる事である。それには、石井氏の跡を踐むべきであり、同氏の轍を踏む事である。我國の權益が侵宮さるゝ事變に際し、我國家の將來を思ふ切なる今日に於て、特に石井氏を紹介するは、血がをどり、骨が鳴る若き人々に世に立つ道を知らしめんが爲めである。

一〇七　求むる心

人には必ず求むる心があり、それが若い人に旺盛なるが常である。若い人の元氣も活動も、盡く求むる心の動きならざるはなしである。

道を求め、職を求め、地位を求め、名を求め、戀を求め、利を求め、娯樂を求め、求めて止まぬが、人情であるが、それが若い時に熾烈なるは今も昔も同じてある。

求むる心あればこそ、奮發もする活動もするが、求むる心に滿足を得ざる場合は、煩悶、懊惱失望、落膽、自暴自棄が相次で來るも、亦免れぬ事である。故に求むる心がある以上、それがなければならぬとする以上は、其心に滿足を得る用意がなければならず、求め得らるゝ準備がなければならぬとする。單に求むる心丈けでは、慾に驅らるゝ事に惰し、無理非道を敢てする事に陷り、遂に何物をも得る能はずして、社會の落伍者になる恐がある。

求むる心があれば、其處に必ず求むる心がなければならぬのである。求むる心に滿走を來たすは求むる心の發動により、何物をか提供した報酬であらねばならぬのである。

若しそれ、更に百尺竿頭一歩を進めて、捧ぐる心が發動すれば、求めずして得らるゝ境遇に立つ事が出來る。然し、此處に目醒むる事は容易の業ではないのである。然し、修養を心がけるが

若い者である以上は、此處に修養すべきあり、修養によりて自己をさゝげる事が出來る樣にせねばならず、さゝげる心の難有さに目醒めねばならぬとする。古より名をなし、功を遂げ、人一倍惠まれた境遇に立つ者は、求むる心に生きたのか、さゝげる心によりて働いた人である。古語に大慾は無慾に如かず、とあるは、求むる心丈けで、求むる心やさゝげる心の發動なきものゝ、成り行きを敎へたものであり、悟らしむる爲めの言葉であるのである。世が開らけ、人智進むで、物が多くになるにつれ、徒に求むる心のみ煽動され、徵發され、飽く事を知らず、制止する所なくなり、餓饑畜生の如くなるは、淺間敷限りである。

天は自ら助くる者を助く、自己の求むる心でなければならず、自己の環境をよくして、自己を安んずるは、自己をさゝげて後の事である。若い時に旺盛なる求むる心に生きるはよいが、求むるものが得らるゝには、求むる心とさゝげる心がなければならぬ事に、確實なる意識をせねばならぬとする。

世の中に面白い生き方をするは、求むる心と、努むる心と、捧げる心との、調和よろしきを得ねばならず、調節がよく出來ねばならない。此處に悟り得る者は、幸なりとする。古語に曰く二

兎を追ふ獵師一兎を得ずと、言や誠に味ふべきではあるまいか、今の若い人々の中には目に映ずるもの、心に映ずるもの總べてを求めやうとしてあせるものが頗る多い、而もその結果は一兎をも得ない者の多いことを遺憾とする。求めんとする場合には先づ求むるものを嚴に選定する必要がある、求むべからざるものを求めんとして努力することは徒勞である、而して求め得ざる場合に自暴自棄となる。求むべきものを嚴選したならば萬難を排して努力し奮鬪するの覺悟が必要である。此の努力と奮鬪が若き人々の生命であることを忘れては、決して何事をもなし得るものでないことを力說して置く。

一〇八　二兎を追ふもの

二兎を追ふものは一兎も得ずとか、あぶはち取らず、とか云ふ古諺がある。理想は生きる若い人達の修養に資すべき事であり、警戒もすべき事であるとする。

若い人達は希望に富み、目的に裕かであるは當然なるも、氣が多くて思慮分別が足らぬでは、

二兎を追ふて一兎も得ず、あぶはち取らずの憾を味ふ事があるものである。世には家を相續せねばならず、修めた專問の業に生きねばならず、結婚もせねばならぬてふ羽目に陷つて進退に迷ふものがあり、最後の分別に惑ふものがある。

伊能忠敬先生は養子とならねばならぬ運命に服從して、先づ養家を興し、後顧の憂なきを見屆けて、五十二歲にして家を去り、東都に出でゝ自己の專問に從事し、遂に成名成功の人となつた事は、長く貴い教訓を後世に垂れたものである。何事にも緩急の別があり、前後の順序がある。永い將來を有する若い人達は、氣を落ち付けて緩急の別を吟味し、前後の順序を見局けて、進退する丈けの餘裕がなければならぬとする。

何もかも一時に得んとするは、前途の遼遠を思はざるもので若朽者である、大器晩成に想到せざるものは、時の攝理を知らざるものであつて盲者である。急いで事を失敗するは經驗にはなるも、大事を喪ふはとりかへしのつかぬ事である。專問に生きむとするは無理からぬ事であるが、就職難の今日職がなければ致方はあるまい。今更鄕里に歸つて父祖に學生のぼろ服を見するは面目ないと云ふも、亦同情すべきであるが、喰ふ事が出來ねば、何んとも仕樣もあるまい。憐を人に請

ひ、世話を人に乞ふよりも自ら喰ふて、時期の到來を待つが分別ある人の態度である。

一時の辱は忍ばねばならず、雌伏も亦已むを得ぬ事である。節を守り操を固執し、陰忍時機の到來を待つは、勇士の姿である。窮して隱れ、苦しむで退くも、亦處世のかけ引である。道を踏み德を行ふて、徐に一陽來復を待つも、亦成功の道程である。嫁して志を喪ひ、目的を果たす能はずと心配するは、若い女に多い煩悶であるが、理解ある男を選ぶ事が出來れば、それも餘計な心配であり、つまらぬ惱みである事が分る筈である。

理想に追はれて社會の實際に分別が足らぬは、婚期を喪ふて更に深酷なる惱を招くが女子にあり勝である。古老の言や、父母の語り草は、味ふて聞く丈けの雅量がなければならず、其處に審議する心懸けがなければならぬとする。繰りかへして云ふ、氣が多くて分別が足らず、希望のみ多くて緩急を知る事が出來ず、前後の別を判斷する事が出來ぬでは、世間の事はあぶはち取らずの馬鹿を見る事となり、二兎を追ふもの遂に一兎をも得ずの愚に陷るものなりと。

殊に今日の不況時代に於ては、あれやこれやと降らぬ宣傳や廣告に迷はされて、一時の目前の利益に目がくらんで、終生取返しのつかぬ失敗を招くことがある。溺れるものは藁をもつかむこ

とは同情すべき事ではあるが、それはふだんの主義方針を缺き、信念に缺けて居るがためである。信念に生きるものは決して迷ひを生じない。世の成功者なるものは必ず信念の所持者である。今の若き人々が轉々として、その職を求めることの出來ないのは正に信念を忘れ、利己に生きんとする爲である。

一〇九　通變の理

古い言語であるが、窮すれば通じ、通ざれば變ず、とあるは、古今を一貫した眞理であり、從つて理想信念に生きる若い人々が信條とせねばならぬ事とする。

商賣は思ひ切るが大切である、との古諺がある。成程商賣では流行を追ふ必要がある、從つて流行に後れたものは、思切つて始末をせねば新柄を仕入る事が出來ず、お客を引きつける事も出來ぬ樣になる。故に場合によつて思切つてよい事もあると知らねばならぬが、凡てにそれを應用する事は出來ぬのである。思切つてよい事も、そうしてならぬ事との分別が大事である。

世渡りは、一寸先は暗夜に向つて行く事である以上、如何なる事が出來て來るか、如何なるものに打つかるか分らぬ故に、凡てに用心し、研究し考慮して行くべきである。從つて深い河に打つかつて駄目だと思へばそれきり進む事が出來ぬが、河を渡るに方法をつくせば、必ず渡る事が出來る。時日がかゝるは勿論の事であり、心配もせねばならぬは當然である。

眞直に行かんとしてもそう出來ぬ場合があり、急がむとしてもそうならぬ場合もあり、周章てゝならぬと思つてもそう出來ぬ事もあり、苦しむまいと工夫しても苦しみ拔かねばならぬ樣にもなるは、世渡りの曲折と觀せねばならぬのである。時間に行き詰りがない以上、多くの問題は時間が解決する。故に時間は尤も公平であり嚴肅なる神であると、意識し觀念する事が世渡りするものゝ覺悟であらねばならぬとする。

吾等は何時でも、何處でも、何事に接しても、常に最善を盡くし、人事をつくす事が出來ねばならぬ。其上に成否、勝敗、進退は、須らく時の裁判にまかすべきである。窮しても最善をつくして居れば後悔がない筈であり、人事の限りを盡くした事であれば自ら慰むる事が出來る。斯くて冷靜に直視して居れば、必ず通ずる方面が分つて來、道のある事が見へて來る。

後悔のある所に周章し、遺憾を感ずる所に狼狽するは、人事に經驗する者の分別する所である急いで事を失敗し、あせつて出來る事をも不純に終らしむるは愚の極である。世渡りは時の經過である以上、決して行きつまるものではない。其處に行つまりがあると觀ずるは、畢竟智慧の行きづまりである。故に智能の啓發は、若い人々の寸時も忘つてはならぬ事である。

不景氣を迎へて行き詰りを感ずるは、智慧のない事であり、頭の働きが十分でないのである。寧ろ不明を恥ぢ、不用意の罰なりと自責すべきである。通變の理に目醒め、其妙諦を體得すべき用意と努力とに精進せば、如何なる場合にも思切る必要はなく行詰に惱む譯もないのである。

農村の不況をかこち、自家經濟の行詰りを悲觀するものは、恰も古い棚ざらしの品物を店頭に陳列して置いて賣れ行きが惡るいと云つて悲觀して居るのと同一である。時の流れを大觀し、速かに取捨選擇し、自ら工夫し、發見し發明すれば必ず道は開け、光明は來るものである、此の道を開くの手段は手でもない、足でもない、只頭の働きにあるのみである。

更に通變の理を簡明するためには空間……時間を資本化し生產化することである、玆に意を用ふるものは必ず光明に浴する事が出來る。

一一〇　篤農家論

イ、篤農家に就て

農業は底の分らぬ、奥の知れない天地を相手にする仕事であれば、研究をすればする程、先人未發の事が採り出され、古人の想像も及ばざりし事が分つて來るから、農業程進取、進歩の仕事はない。二宮尊德翁は既に

　　音もなく香もなく常に天地は
　　かゝざる經をくりかへしつゝ

と喝破して居るではないか、不言の經を讀み、不語の言を聞くは、農民の腦力でなければならぬのである。

農民の眞面目を發揚し、農民道に終始して地方の開發に努め、遠近に感化を及ぼすは、農民の中で頭角を表はすものである。世間如斯人を篤農家と推賞し、農民の典型とする偉い農民と世間

から認められ、農民から師と迎へらるゝは、年齢の如何を問はず篤農家である。篤農家は到處に在り、篤農家たらむと修業を積み、努力を敢てしつゝあるもある。愛知縣農會は明治四十三年の春全國篤農家懇談會を名古屋市に開催した事があり、當時各府縣から四五名の篤農家が集つた。同縣農會では、篤農家懇談會を毎年一回開き、老篤農家に對しては、多年の功勞に對して敬意を表し、青年篤農家に對しては大成を期すべく激勵をして居る。愛知縣の農事が聊か他に優るものがあるならば、それは篤農家を認めて、それを感激せしめ奮勵せしめて居るからであらう。故に篤農家を後援し、篤農家を養成するは、農村振興の第一義であるのである。

ロ、篤農家は信念の人である

篤農家に共通の點は、信念の強い事である。斷じて行へば鬼神も之を避く勇氣は、精神一到何事不成の氣慨も、倒れて後止むの覺悟も皆信念に基く事である。

信念の人には、人間以上の或ものを認め、敬虔の情がある。剛情の中に頭が下る事があり、頑固の間にも人を感化せで止まぬものがある。

多くは宗教上の信仰を持つて居り、皇室中心主義であるは妙である。自得したるものなるが故に、人の說に動かされず世の流行に誘はれず、獨り其道を行くの趣がある。故に何處となく、人の信賴を得、畏敬を招くものが認められ、大丈夫の感を深ふする。故に篤農家は確信の存する人である。不撓不屈の人であり、辛棒のよい根氣の人であらねばならぬのである。

ハ、篤農家は創設的である

大衆のなす所に滿足せず、流行に追はるゝを屑とせず、局面を展開し、更生の機運を作らむとする結果、必ず創設的の事をするは、篤農家に共通の事である。

適地適産を唱道した石川翁、農道を提唱した大田翁、小作農より百姓をし始あた水原翁ばかりでなく、苟くも篤農家と認めらるゝものは、必ず創設的な事をするものである。之れ篤農家が舊套を打破して日新の事業をし、舊慣を破つて日進の機運を作る所以である。

今日の農村が萎微不振、疲勞困憊の悲鳴を上げねばならぬのは、舊套に囚はれ舊慣に制せられて居るからである。

時勢に順應して經營を改め、團體の發達した今日、よく團體の利用に努めなば、農村を更新し農民を更生せしむる事は、決して難事ではないのである。これを躬行以て證明し、實踐以て則る所を知らしむるは、蓋し篤農家に如くものはないのである。

ニ、篤農家は指導者である

篤農家は人格と手腕との人である。故に人なき當時に於ては、官途にひき出されたものである石川翁も太田翁も水原翁も、それは同樣であつた。然し、農業教育の進んだ今日、學歷の人が多く官途につく事になつた爲め、今日以後の篤農家は終始民間の人であり、あつてほしいものであると思ふ。

官途に立てば當然指導者の地位に立たねばならぬが、民間に伍して居ても頭角を表はしたものが篤農家であり、何等か人に則る所あらしむるが篤農家である以上、篤農家は必ず指導の地位に立たねばならぬものである。

交通機關が開けて出入に便利となり、知新求巧の必要を認めて視察が流行する今日、篤農家の

所へは視察員が殺到する。氣の毒な程來る人があり、厄介な程訪ねる人があるものでる。故に篤農家は指導上の心得がなければならず、指導によつて感化する所がなければならぬものである。之れは篤農家の誇りであり、又篤農家の義務であるのである。

ホ、篤農家は餘裕がある

篤農家はら業ばかりでなく、人間味がなければならず、他に比して人格上にも餘裕がなければならぬのである。英雄の胸中閑日月ありとあるが、これは英雄豪傑に限つた事ではない。凡ての人に其心境がなければならぬのである。

多くの篤農家は、詩歌のたしなみがあり、俳句や發句に巧者なのである。上手下手は別問題であるが、其處に趣味があり、好樂があればよい。或は歴史の研究に、或は書道の練習に、或は弓馬の術に、或は聲樂絲竹の技に、浩然の氣を養ふ事が出來ねば、食ふ事に追はるゝ日暮に墮する恐がある。

世の中には安職而忘名、樂業而忘利を主義として、唯農業に働ける所に趣味があり、慰安があ

るとするもある。それも結構であり、面白いとする。唯それは悟つた人にして始めて出來る事であり、道の人として漸く出來る事であるとする。

ヘ、篤農家は主義に生きる

篤農家とは必ず守る所がある。それを主義に生るると云ふ。尊農主義、報德主義、自力主義、色々であるが、兎に角操守のある所に篤農家の面目があるのである。

頑固なりと認められ、剛情なりと見られ、始末に困ると云はれ、仕樣がないと惡口を云ふものもあるが、それは人の批評であつて、篤農家を動かす價値のないものである。

今日の人は餘りに移り易く、屈し易いので、動かぬ、移らぬ、屈せぬものが目立つ。其處に偉い人の面目があり、篤農家の價値を存する。主義に生きる人ほど強いものはない。思想上面白からぬものがある世の中、主義に生る人ほど恐るべきはない。故に日本民族である事を意識し、我國民を養ふ母なりと意識し我農村に堅く主義を守つて皇國繁榮の道に立ち、其業にいそしみ、他をも指導し感化する篤農家は、眞に我帝國の至寶であるのである。篤農家は須く自重すべきであ

り、世の人亦篤農家を尊重すべきてある。

ト、篤農家たらむ人々に

今の農村に目醒めた青年は多數ある、彼等は或は農業經營に一生面を開かんとし、或は農村の現狀打破に精進せんとし、或は農家の困憊の域より脫ぜしめんとして孜々營々として居る、それは目醒しきものであり末頼母敷ものもある。

彼等の多くは篤農家たらんと心がけて居るもあり、唯一筋に其道に進むもあるが、彼等は盡く篤農家にならねばならずせねばならぬのである。

篤農家の資格は色々あるが、これは如上の通りである。青年諸君の在所には、求れば必ず篤農家はある筈であり、遠い所に居る篤農家も、今日は訪ねんと思へば訪ねるに難作はない。唯時代によつて篤農家はかゝはる。年老いた篤農家は既往を知るは便なるも、現代のやり方を知るに不便である。新しきは、新時代に活躍する篤農家に學ばねばならぬが、然し、老いたる過去の篤農家にも學ぶ所が多い事は、青年の知らねばならぬ事である。

老人なりと馬鹿にするものは己を馬鹿にするものであり、過去は論ずるに足らずとする者は知新に心なきものであるとする。苟くも篤農家と云はるゝ人々には共通に學ぶべき點があり、經驗に富める人ほどたゝいて味が出るものである。

若き人々よ、我國家のために篤農家となり自他を進めて、皇國繁榮に貢献せん事を。農村の現狀が危い今日なれば、特に若き人々に、篤農家に就ての注意を示す事としたのである。

昭和七年二月十九日印刷
昭和七年二月廿二日發行
昭和七年三月二日再版

世に立つ道
定價金一圓五十錢

著者　山崎延吉

發行兼印刷者　東京市神田區小川町四一
合資會社泰文館代表者
伊藤巳之助

印刷所　東京市神田區表神保町十番地
泰文館印刷所

發行所　東京市神田區小川町四十一番地
合資會社　泰文館
電話神田(25)四四九六番
振替東京六七六〇三番

山崎延吉先生著（最新刊）

村民訓

四六版箱入
クロース上製
定價金一圓五十錢
送料十錢

今や農民は極度に困憊し、文明も墮落して社會も行詰る、これ都會偏重の結果である。茲に町村の振興のみが救國の大眼目たらんとする時に當り、曩に御進講の榮を擔へる農村の權威山崎先生は時世を深憂して「村民訓」を公にせらる。正にこれ旱天の慈雨、而も先生に於てこそ最適者、村民のために心をこめて書かれたる、この名玉篇は、人に、村に、生命と自治との道を說いて、懦夫をも起たしむる慈父の言葉であり、經世の大識見による一家、一村の經營訓であり、繁榮の方法書、與村の羅針盤である。

發行所　東京市神田區小川町四番地　振替東京一三〇六七　泰文館

山崎延吉先生著　御前進講記念出版

農道說話

四六版リネン
定價一圓五十錢
送料十錢

農業經營については、術と法と道の三つを完備することが必要である。而して今日迄の農業指導者は農作物栽培の術、家畜類の飼育に關する所謂飼育の術と、資本、土地勞力の組合せ少費多獲の經營法については殆ど至れり盡せりの域にまで達して居るのであるが、然し今迄に道を說いたものは殆どない。栽培の術や、經營の方法が如何に進步發達しても、之れを栽培したり飼育する人が人道や人道に背いた術と法であつては決して農業は成り立つものではない。

著者山崎先生は此の點に意を止め、農國本の大精神を樹立し之れを徹底せしむるには、農民は如何にして生くべきか、進むべきか、世に處すべきかの、所謂農民道を說くの必要ありとして南船北馬、日本內地は勿論植民地の津々浦々に至るまで農民道を說くこと卅年途に至誠天に通じ天聽にまで達することの出來て、大農民道は集めて本書の內にある、指導者は勿論、四千萬の農民全部は是非共一讀しなければならぬ珍書である。

發行所　東京市神田區小川町四番地　振替東京一三〇六七　泰文館書店

山崎延吉著

齊家の栞

四六版二百六十頁
定價金一圓五十錢
送料十錢

「齊家」とは云ふ迄もなく家をおさめることである。故に「齊家の栞」とは家業をおさめるしほり、即ち家政の指導の意味である。本書の著者山崎延吉氏は農業教育、農民教育、農村教育に關する先覺者として、又恩人としての第一人者であり、町村自治の創設者として人の知る所であるが、此等の總ての教育指導の根本即ち基礎問題は先づ各人が町村、國家、社會の組織分子の一因子である各個人とその家をおさめることにあり、齊家の道に就てあらゆる方面より說き去つたもので、一家の主人、主婦、青年、處女は勿論、學者も、官吏も、學生も、宗教家も、何人も一度本書を手にすれば自然に端座し襟を正さずして讀む事の出來ない修身書である。

近來輕薄な外來思想のために、親子兄弟垣にせめぎ、人倫の道すたれ、國家社會の基礎亦動搖しつゝある際、本書の公刊は恰も航海に羅針盤を失つた船が燈臺を發見したと同樣の感がある。苟も人として社會に生存せんとするの士は即刻一讀あらんことを切に御繙めするものである。

發行所 東京市神田區小川町四十番地 振替口座東京一三〇六七 泰文館

山崎延吉
稲垣稔 共著

農村の新教育 全村學校

四六判リンネット
定價金二圓五十錢
送料十四錢

文部省令に依る日本の教育は外形ばかりの教育であつて、內形即ち心の教育でない、此の點に多くの物足りなさがあるので近頃精神教育……人物教育を中心とした私立學校が設けられたり、或は新式の教育方法が行はれるやうになつた。

本書の標題とする全村學校もその內の最も特色のあるもので、全村を單位とした人間教育の方法であつて、最近各地に開校されて其効果を認められ、農村の教育に一大爆彈を投じたものである。

直接教育事業に從事して居ると否とに拘らず、苟も人間教育に心あるものの一讀しなければならぬ珍書である。

發行所 東京市神田區小川町四十番地 振替口座東京一三〇六七 泰文館書店

農學士 山崎延吉先生著 ◇農民必讀の書◇

農村計劃

四六版箱入美本
頁數三百六十頁
定價金二圓也
送料十二錢

國家は十億に近い巨額の資金を投じて都市計畫を敢行すべくそれ〴〵準備中である、然るに五百五十萬の戸數と四千萬の人口を有する農村のためには殆んどなんの計畫もない、凡そ社會政策なるものは最大多數を有する國民を基礎としたる最大なる幸福を招來すべきものでなければならぬ。然るに政府が小數の都會居住者の幸福を中心とした都市計畫にのみ力を入れ、農村計畫を無視してゐるがために今日のやうに騒がしい農村問題が起つて來たのである。著者山崎延吉先生は夙に此の社會的一大缺陷に着眼され自ら農村計畫を樹立し以て國家存立の基礎である農村の繁榮を計らんとするのが即ち本書である、苟も農業者たるものは勿論、都市生活者と雖も是非一讀を要すべき珍書である。

發行所 東京市神田區小川町一三 振替口座東京六七六四〇六 泰文館書店

小林水楊著

農村文化と教育

四六判リンネット
定價金壹圓
送料十錢

黎明期である可き現在の我が農村は、獨倉力に富む計畫的な産力のある生業に對して飽く迄も誠意のある努力的人物を要求して居る。

而して清新なる希望に滿ち絶えず向上して行く所の眞の農村文化は斯る人物に依つて建設されて行く。堅實なる、よき農村文化の建設は目下の急務である。

人間の改良が總べての改良の出發點にして又到着點である意味に於ても農村不振の今日農村教育者としての使命は果して奈邊に有るか！

本書は農村の小學校教育、實業補習學校、地方に於ける農業學校、師範學校、中學校、高等女學校の教育に對して何を考慮の中心となす可きかを如上の教育觀より之を批判し更に一般文化の建設上の問題を考究したるものである。眞に農村の現況を憂ひ、而して力ある農村教育を爲さんとする人々に一讀を奬めたい。

發行所 東京市神田區小川町一三 振替口座東京六七六四〇六 泰文館書店

高橋是清題字
三土忠造題字

理想的農業國

デンマーク土產

上塚司著

四六版洋裝
定價金一圓
送料八錢

北歐の一小國丁抹は理想的の農業國として世界に謳歌されて居る。從つて人も吾も其國の內容を知らうとして居るが、從來丁抹を紹介した著書は或は繁に失し、或は簡に過ぎて要點を知るに不便であつた。然るに本書の著者上塚氏は衆議院議員として萬國議員會議に列席のため丁抹に渡り、親しく此の理想國を視察し何人にも容易に理解し得らるゝやうに、所謂丁抹みやげとして我が農村に提供して呉れたものである。著者は農林大臣秘書官とし、或は商工大臣秘書官とし或は大藏大臣秘書官として國家の重要產業政策に關與しつゝある前途ある少壯代議士である。以て本書の價値の一般を知る事が出來やう。丁抹を知らんとするの士は速かに一書を座右に備へなければならぬ。

發行所 東京振替東京 神田區小川町四番地 泰文館書店 一三〇六七三

東京帝大農學部助教授 衣川義雄校閲
同 研究室 馬俊雄著

有利な副業

アンゴラ兎の飼ひ方

四六版クロース
定價金一圓廿錢
送料八錢

熱血漢馬氏は東京帝大農學部に在學中から農村の不況を深慮し、アンゴラ兎の將來を達觀して專心之が研究に沒頭し、卒業後も或は研究室に或は實際飼育に日夜專念し、今その研究の一端を本書に託し、江湖に之が福音を普く行き渡らしめんとせらる。眞に不況農村は勿論失業都市に對する復活劑である。

本著內容は從來の養兎書と異り、理論と實際を兼ね、アンゴラ養兎に對する初心者の好伴侶として絕好書であることを確信すると共に、敢て產業恐慌打開と、國家的新產業の建設のために本著は將に航海者の羅針盤である。

發行所 東京振替東京 神田區小川町四番地 泰文館書店 一三〇六七三

川崎甫著

おいしい漬物のつけかた

本書の特色の第一は高尚なる理論高價なる器械・藥品等によらず從來各家庭に有合せの材料器具等を使用して、併も近代科學の光りに惠まれたる品質最良好なる食味絶佳なる漬物を簡單平易に經濟的に漬け上ぐる方法を詳述したることに在り、更に第二の特色は徒に一地方の經驗にのみ囿泥せず、廣く全國の慣行を調査し、採長補短殆ど全國の典型的漬物の全部を網羅して遺憾なき点にあり、第三の特色は文字頗る平易にして何人にも解し易く且直ちに實行し得られ價格至廉にして万戸必備の家庭寶典たるのみならず、普く農産製造講習會、料理講話會等の教科書參考書として最適なる良書なること之れなり、著者は斯業實際界の權威にして多年留意沈潛する所頗る深く其造詣大に見るべきものあり、今般繁館の請を容れ筆を採て漸く上梓の榮を擔へり、希くはおいしい漬物によりて各戸全家庭の食膳を賑かにし、家庭愛の徹底的光輝を發揚せんとする人連に一本を讀んで吾人の言の欺かざるを知られよ。

四六版クロース上製函入
定價金一圓
送料八錢

發行所 東京市神田區小川町四番地 泰文館書店
振替東京六七〇六 電話一三〇六

岩谷愛石著

我等は何を爲すべきか

人生は戰の世界である。悪戰苦闘は、吾等が生るるや、既に天より與へられたる試練である。吾等は此天の試練に堪へ忍び之に打ち克ち闘つて行く、そこに人生の價値があり、人生の意義があると思ひます。本書の著者は全國青年指導者として既に二十年間、凡ゆる苦闘が體驗し、凡ゆる困難と戰つて來た、その汗の記錄、血と涙の體驗苦闘談、一言一句悉く吾等處世の活教訓ならざるはない。殊に「一日一善」「一事貫行」「時間の活用」「貧乏退治」は、現代社會の思想動搖、生活不安の今日に於て如何に大なる光明と希望と幸福とを與ふるであらうか。「日曜百姓梅原青二君の努力の生活」「模範青年河本喜久一君の親子の涙物語」吾等は、本書一冊に依つて如何に大なる感激と、教訓と光明と歡喜と希望を與へらるるかを思ふとき、滿天下五百萬の青年男女諸君は申すに及ばす、世の青年指導者教育者は素より、凡ゆる階級の人々にぜヒ本書の一讀を勸めたいと思ひます。

四六版リンネット洋裝箱入美本
定價金壹圓五拾錢
送料十錢

發行所 東京市神田區小川町四番地 泰文館書店
振替東京六七〇六 電話一三〇六

岩谷愛石著

人生問題の解決

吾等は何の爲に生きて居るか

四六版三百頁　定價金壹圓參拾錢　送料八錢

著者は二十年間全國青年處女の指導者として、實踐躬行、汎ゆる艱難辛苦を體驗し、人生の苦闘を切り拔けて來た、其悪戰苦闘の汗の結晶、涙の記錄を人生問題解決の一書の中に收めて、『人はパンのみにて生くるものにあらず』と幾多聖哲の人生問題解決の眞髓を說き、神、佛、儒、の人生觀を說き、或はマルクスの唯物主義を說き、サンシモンやコントの實證主義を說き、ミルやベンダンの功利主義を說き、カントの人格主義、ベルゲソンの生命主義、オイツケンの神秘主義等を網羅し、靈魂の不滅と、信仰の確立、人生究極の目的等た最も明確、且つ徹底的に說破してある。思想界混亂の今日、遙える現代國民、殊に青年處女の前途に一大光明を與ふるものは本書の他に無いと信ずるのである。

敢て全國青年團處女會員、學生、教育者、其他汎ゆる階級の人々に一讀をすすめます。

發行所　東京市神田區小川町六七六　振替東京一四〇六　泰文館書店

岩谷愛石著

農村青年の行くべき道

四六版箱入美本
頁數百八十頁
定價金九拾錢
送料八錢

◇農村青年の指針◇

働いても働いても食つて行けなかつた農村に、働けば働くほど食へなくなると云ふ時代が來た、これまでの百姓はたゞ働きさへすればそれでよかつた、之からの百姓はたゞ働くだけでは食つて行けない。頭で考へ手と足と人と人との共同の力で働くことが必要となつて來た。昔から一百姓は馬鹿でも出來る一蘭が安い、米一石の生産費が二十六圓三十五錢之で相場が十六圓では一蘭が居つたが今日の百姓は馬鹿でもできない。米を作れば米が安い、蘭を作れば十圓の損である。其上農家一戸當りの負債が千圓以上もあるといふ。農民よ！お前は本當に何處へ行く！しかし今日の百姓でも「働けば必ず儲る」百姓は時代を考へ、方法を考へ、研究努力で奮闘すれば、一年三百六十五日一時間の利益が三十八錢七厘になつて居る、馬と人とが話が出來る、共同販賣、共同組合、自給肥料で土地さへ肥せば米でも稲と麥でも自由に穫れる。多收穫より多收益、生活改善、實行組合、時間と金とも勞力の活用、副業の研究、負債の輕減、村是の確立、農村計劃、米價の安定、これ皆農民一致の團結力で理想の鄕土が建設の國營、農村文化の建設等々。個人々々の孤立では結局農村破滅に終る、農村打開の方法は農民自身の奮闘にある、土に生れて土に生き、土より生れたものは食ひ、土の中から伸びて行く。農村死活の運命は、たゞ青年諸君の双肩にあり、敢て本書を全日本の青年諸君に捧ぐ。

發行所　東京市神田區小川町三〇　振替東京六七六　泰文館

農學博士佐藤寛次監修各專門大家編纂

受驗
參考

綱要農業叢書 廿四卷

三六版リンネット
洋裝函入美本
定價金一圓ヅ、
送料六錢ヅ、

第一編 農業經濟政策論　第二編 農業汎論　第三編 栽培汎論
第四編 普通物作栽培學　第五編 工藝作物栽培學　第六編 蔬菜園藝
第七編 土壤學　第八編 肥料學　第九編 果樹學
第十編 養蠶學 上　第十一編 養蠶學 下　第十二編 桑樹栽培學
第十三編 作物病理論 上　第十四編 作物病理論 下　第十五編 作物害蟲論 上
第十六編 作物害蟲論 下　第十七編 畜産學　第十八編 農産製造學
第十九編 農具學　第二十編 農業氣象學　第廿一編 林學汎論
第廿二編 農業土木學　第廿三編 花卉學　第廿四編 作物育種學

右の内太文子（ゴヂック）は發行濟、他は引續き發行します、
分賣致します。

發行所 東京市神田區小川町四〇番地 東京振替口座六七一三 泰文館書店

三重縣立名賀農學校長 谷本米洲著

理想農村の建設

四六版リンネット
定價金二圓五十錢
送料十六錢

一、近時農村振興が唱導され其對策は種々論議されつゝありと雖、而も振興の事實を容易に見る能はざるは農村の人たして理想信念に生かしむることが出來ぬからである。又今日農業の經營容易に更まらず、農家の生活難は益々劇甚を加ふるに至るも亦之に對する理想信念を缺くからである。

一、農家の活計を裕にし、住よき村を創造するの道は一に農業者其人の自覺により農業に對する高邁なる理想と鞏固なる信念を持してより農業の本質を理解し時代に順應したる合理的經營法を行はしめねばならぬ。此意味に於て理想的中心人物田鶴浦宏保を假設し、其一生を通じて農業の理想と信念に奮鬪的生活を斷行する其道程を叙述し、萎微頽頽に瀕せる現今農界の元氣振作に資せんとするのである。

一、田鶴浦宏保！年少にして志を農業に立て中等農學を修めて自立自營し、三十にして家を齊へ業を興し産を治め富を致し四十にして老後の計子孫の策全く成る、爾後主ら奉公の身となり、全力を興村の爲に輸し六十にして天下無雙の理想鄕端穗村を建設す其整々堂々たる活躍、實に修身齊家治國平天下の道を得たるものと謂ふべし。

一、故に本書は農家經營農村經營の直接責任たる戸主村長より農村自治の幹部たる吏員教員僧侶神官等の自治民育の指針たるは勿論小學校、農學補習學校、農學校の兒童生徒より農村青年等、立身齊家、興村の志あるもの、修養の標的として權威あり又趣味あり必ず一讀を要すべき良書たるを疑はず。

發行所 東京市神田區小川町四〇番地 東京振替口座六七一三 泰文館書店

石田傳吉著

理想の村

四六版九百頁
クロース美本
定價二圓五十錢
送料十四錢

現代に於ける地主と小作の醜陋なる心理を發きて兩々與せず、その蒙を啓き倫理的に經濟的に科學的基礎に立脚し始めて階級意識を脱せし人間生活の殿堂理想の村を展開し來る。そこに爲政者も資本主も小作人も無い赤裸々の人間を見る事が出來る。堂々九百頁に餘る長編大創作である。

永井柳太郎氏曰く
その一頁々々が著者の確實なる知識と深刻なる同情とを想像せしむ……。

高島米峰氏曰く
言々句々農村の對來に同情ある傳道者の確信の表現である。

内ヶ崎作三郎氏曰く
之を讀めば地獄に沈みたる貧村が天國の如き狀態に變する有樣愉快何とも名狀しがたし。

發行所 東京振替 神田 小川町六七 田中 一四〇六六 泰文館書店

農業教授資料

最新刊

神戸昌平著 ▼趣味と實益との横溢▲

農業界之現象 耕種篇

全一冊
菊判美本
定價二圓
送料十二錢

一、現今農業に關する著書も亦いはゆる汗牛充棟管ならざるの狀態であるが、農業界の現象を平易簡明に說述せるものは殆んど皆無といつても過言でない。然るに本書は趣味と實益とを兼ね備ふるが如く、多年實際に親しめるの經驗と諸學者の新研究とを發表してこの缺を補ひたるものである。

二、本書の内容は汎く農業に從事せらるゝ士の參考と農業知識の增進とに資すべきものが少なくないが、殊に農業教育の實際に當らるゝ教師の資料に恰適すると共に、一般農業研究者の座右に缺くべからざる良書である。

三、本書は主として耕種界に屬する作物の改良種苗の育成管理收穫の實際より食糧問題などに至るまで、廣く各般の事項に基いて縱横に說述せるものであるが、引續いて土壤肥料篇、畜産篇を刊行して之が完結を告ぐるのである。

發行所 東京振替 神田 小川町六七 田中 一四〇六六 泰文館書店

丸山義二著〔最新刊〕

農村を語る

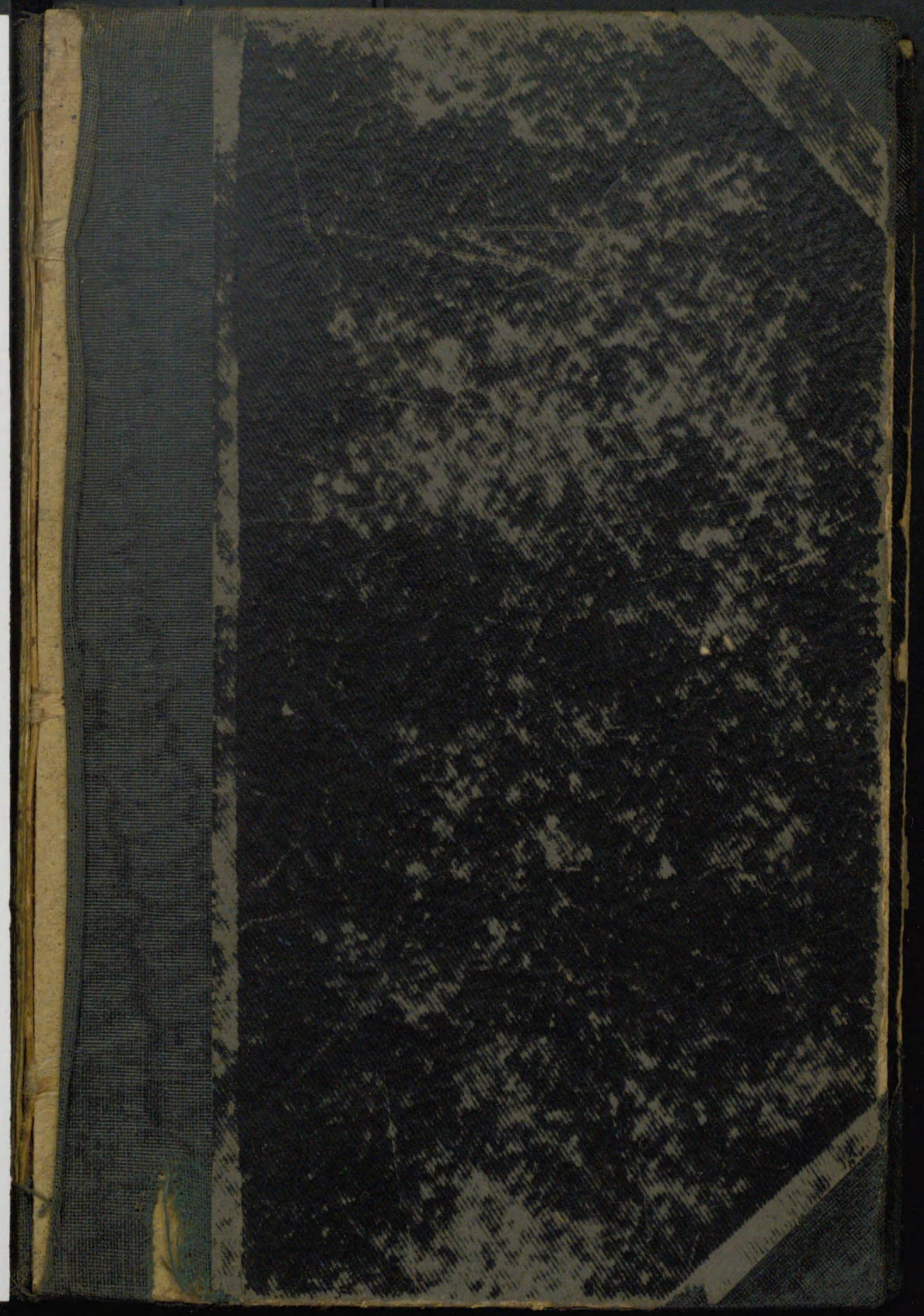
◇百パーセントの農村記錄！
◇農民文學の最高峰！

世に農村を語る記錄は多い。しかし、眞の農村を語つた記錄は尠い。「農村を語る」は、その至つて尠い農民文學の最高峰だ！ 百パアセントの農村記錄だ!! 本著の內容「農村スケッチ」「土の夏」「土の秋」「勞働日記」の四篇八十三の小話は、土に生れて土に成長した著者が親しく目に見、耳に聽き、身を以て體驗したところの農村寫實物語であり、ピチピチと活きた農民の生活記錄である。農業恐慌の近づきつゝある今日農村の現狀を知ることは、まさに時代人の急務でなければならぬ。現在の農村が何處へ行き、明日の農民がどう考へどう動くであらうか？ この誰もが知りたい疑問符に解決の鍵を與へるのが本著だ！ 本著を讀まずして農村を語り、本著を繙かずして農民を語る勿れ!!

四六判ナポレオン表紙
三百二十頁美本
定價金一圓二十錢
送料十錢

發行所 東京市神田區小川町四〇番地 振替東京六七六六 泰文館書店

609
391



Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black